

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和5年7月1日（土）

場所：世田谷区立教育総合センター

午後 1 時開会

司会 定刻になりましたので、令和 5 年度第 1 回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

本日の司会進行させていただきます、政策経営部長の有馬と申します。どうぞよろしく
お願いいたします。

開催にあたり、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。

第 1 部「新たな学びの実践に向けて」です。基調講演を 20 分程度、その後、休憩を挟み
まして、区長と教育委員会に、さらに講師にも加わっていただき、意見交換を行います。
なお、本日の意見交換をさらに充実したものにしたいと考えておりまして、第 1 部の新
たな学びの実践に向けてに関する御質問を皆様よりいただき、御質問の一部ではござい
ますが、意見交換の中で御紹介させていただきます。会場にお越しの方は入り口でお渡し
いたしました質問票に、オンラインでの御参加の方は Z o o m の Q & A 機能にて質問をお
寄せください。質問は第 1 部の基調講演の後の休憩時間終了までに締め切らせていた
だきます。なお、本日御紹介できなかった質問につきましては、区に関する御質問につ
いては、質問を集約した後、後日、区のホームページにて回答を掲載いたします。

次に、第 2 部「教育大綱の策定について」でございます。当初予定していたプログラム
ですと、「教育大綱(素案)について」としていたところでございますが、教育大綱(素案)
をまとめるに当たって、非常に多くの要素や考え方があることから、本日は、教育大綱
に盛り込むべきキーワード、要素、方向性の議論を行います。また、傍聴いただいで
いる皆様からも御提案をいただき、今後、教育大綱の策定に取りかかり、大綱をお示
したいと考えております。会場にお越しの方は、入り口でお渡しいたしました様式に
御記入の上、お帰りの際に入り口の回収箱にお入れください。オンラインでの御参加
の方は、Q & A 機能にて、第 2 部の開始から会議の終了までの時間で御提案をお
寄せください。改めて第 2 部の開始時に御案内いたします。

それでは、開催に先立ちまして、区長の保坂より御挨拶申し上げます。区長、よろ
しく
お願いいたします。

保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。

本日は総合教育会議をこうして開催することになりました。

総合教育会議とは何かという話なんです、地方教育行政の組織及び運営に関する法律、
地教行法と略して言われることが多いんですが、この法律の改正に伴って、区市町村長、

あるいは都道府県知事などの自治体の首長が招集して、教育委員と共に、公開の席で議論する場を設けましょうと。そして、その場で教育の大きな指針となる大枠の考え方や方針を教育大綱として定めようというつくりになってございます。教育大綱というのは、そういう意味では、区長部局で呼びかけて、この会議を通してつくり、議論していく、そして、最終的に教育委員会に出来上がったものをお渡ししていくという関係にございます。

さて、本日、素案という形で事務局がつくったものを議論するという事も考えていましたが、もう少しこの議論を徹底しようではないかということでございまして 実はこの総合教育会議は、制度は8年ぐらい前にできたんですが、最近、ほとんど開かれていない自治体もあるらしいんです。世田谷区は公開シンポジウムのような形で、シンポジストは教育委員であり、私であり、教育長であり、また、ゲストスピーカーでありという形でやってきました。

平成27年、2015年からの総合教育会議では、一貫して、学びの多様性、学びの多様化が必要ではないかとか、非認知能力に着目して、小さい頃からの遊びと学び、育ちに着目しようとか、幼児教育と学校教育のつながり、配慮を要する子どもたちの支援についてどうあったらいいのか、子どもたちの自己肯定感をしっかり形成していくにはどうしたらいいのか、SDGsとこれからの教育、ICTをどういうふうに使っていくのか、多忙化する学校の教員をどういうふうに支えていくべきなのか、あるいは、学校そのものを支援するということはどのようにあるべきか、そして、本日も議論しますけれども、不登校のお子さんたちがコロナの3年間を経て大変増えているという問題などについて議論を重ねてまいりました。

そうした中で、同時並行で澁澤委員にもいろいろと議論をしていただいていたんですけれども、総合教育会議の議論ともシンクロしながら、世田谷区基本計画審議会答申 後ほど資料説明があると思いますが、区の最上位の基本計画の中で、学校教育についてという一文がありまして、御紹介すると、「画一的な学び方から個に応じた多様な学び方へとこれまでの学校教育を大きく転換させる時期を迎えている。子どもたちが自ら地域課題の解決策や興味、関心が高いテーマなどについて考える探究的な学びへと転換させ、『参加・協働』の視点も」というふうが続くんですけれども、かなりはっきりした言及がございまして。

そして、本日、第1部におきましては、「新たな学びの実践に向けて」ということで、株式会社SPACEの福本理恵さんに御講演をいただきたいと思っています。この間の議論では、強い好奇心や感受性、鋭敏な想像力や五感などに恵まれつつも、学校環境になじめ

ない子どもたちが少なからずいるということも私の耳に届いているところでございます。子どもたちの居場所をつくり、学校教育の中で様々先生方が取り組んでいる一方で、一人一人の個性や能力を生かして、生き生きと学んでいけるような新たな学びの場が求められているのではないかと議論もしてまいりました。今日は、福本さんの発題、基調講演を基に、まずはそこをディスカッションしてまいりたいと思います。

そして、第2部におきましては、教育大綱をどのような枠組みで、また、内容でつくっていくのかということについて議論を詰めてまいりたいと思います。

長時間にわたりますが、どうかよろしく願いいたします。

司会 ありがとうございます。

ここで、本日の会議に参加されております世田谷区教育委員会の委員の皆様を御紹介させていただきます。

渡部教育長です。

澁澤委員でございます。澁澤委員は、現在、NPO法人理事長を務められており、各地で講演などを行われております。また、次世代を担う青少年の育成や環境啓発活動に携わるなど、様々な分野で活躍されております。

続きまして、中村委員でございます。中村委員は、中学校の教諭、副校長、世田谷区立中学校長を歴任し、校長会会長にも就任されており、東京都の教育の現場の第一線で活躍されておりました。

続きまして、鈴木委員でございます。鈴木委員は、世田谷区立小学校PTA連合会協議会会長を務めており、区立小学校の学校支援コーディネーターなども務められております。

なお、坂倉委員につきましては、本日御欠席されておりますが、事前収録した動画をお預かりしておりますので、後ほど御紹介いたします。これまで慶應義塾大学のグローバルセキュリティ研究所特任講師や世田谷区社会教育委員などを歴任され、現在は東京都市大学都市生活学部教授を務めるなど、教育行政の発展向上に貢献いただいております。

委員の皆様、本日はよろしく願いいたします。

それでは、第1部「新たな学びの実践に向けて」に移らせていただきます。

まず、福本理恵様により御講演をいただきます。

福本様は、株式会社SPACEのCEOであるとともに、東京大学未来ビジョン研究センターの客員研究員でもございます。ユニークな子どもたちに寄り添った一人一人が生かされる環境づくり、地域リソースを活用した個々に合わせた学びづくりなど、これまで様々

なプロジェクトの立ち上げ、運営をされております。

本日は、「一人一人が輝く個才の時代」をテーマにお話しいただけると伺っております。

それでは、福本様、よろしく願いいたします。

福本氏 皆様、こんにちは。先ほど御紹介いただきました、株式会社SPACEの最高情熱責任者という肩書で代表をしております福本理恵と申します。

本日は、世田谷区の新しい学びのきっかけになるような、一人一人が輝く個才の時代にどんな学びが必要なのだろうかというところを、私が行ってきた教育実践のお話をさせていただきながら、御紹介させていただきたいなと思っております。

私が行ってきた教育実践は、生きるために必要な学びとは何かということを一貫して行ってきたように思います。当たり前過ぎることなんですけれども、私たちは何のために学び、そして生きていくのか、それぞれの違いというものが当然にありながら、それを携えて、どんなふうに幸福を享受しながら共存していけるのか、このことを考えるような学びをずっと様々なプロジェクトを通して行ってきたかと思えます。

生きるための学びに、子どもたち、私たちに必要なものは何だろうかと考えたときに、感覚の軸を自分の中に持つ。それは身体感覚として、何か体験を通して心地がいい、心地が悪いという境界線をつくりながら、子どもたちの中で、これはいい、これは心地が悪いという感覚の軸をつくっていくということが、1つ、自分の人生のレシピをつくっていくために必要なものだと思っています。

そして2つ目の軸としては、知識の軸です。学校に入ると、様々な知識を教科書と授業等で学んでいくわけですが、それが机上の知識ではなく、日常の中で暮らしをつくっていくためにどんなふうに役立つのか、そこに結びついて初めて知識が活かされていく、その知識をどんなふうに自分の中に蓄えて、実用的に使うのか、それが知識の軸だと思っています。

そして3つ目に大事な軸というのが、価値観 哲学とも言えるかと思うんですけれども、どんな生き方を自分はしたいのか、どんな暮らしの中で、どのような心震える体験を通して、自分が感動しながら、人と感動を共有しながら生きていくのか、この哲学の軸を磨いていく、それこそが生きていくために必要な、子どもたちにとっての根幹となる3つの軸をつくっていくことになるんじゃないかなと思っています。

よく社会に適應するようにという言葉も聞かれるんですけれども、社会に適用する前に、もしかすると私たち人間社会が自然に適應する、自然のことわりがあることが本当に社会

の中にあるんだろうかということも含めて、教育の環境をつくっていくときに、果たして今の教育はそのことわりの中で無理がたたっていることはないだろうかと問いながら、教育の根本、本質というものをつくっていくことを私たちはやってきたかなと思います。

その中で、自然の中にあることわりを社会の中にも取り戻していくと、自然と個々が生きていくような個別最適化が行われんだろうかというのが学習の環境をつくっていくときの視点にもなりますし、また、偶然に出会うものの中で、一人一人が体と心と頭を使いながら、試行錯誤する中で、自分に合うもの、自分に合わないものの軸がどういう形で変化していくのか、自分自身にフィットするものを見つけていくということが自分らしさの発見であり、そして、出会うものを設計するというのが教育のデザインなのかなと考えながら、実践を行っています。

本日、限りある時間の中で、どういう実践を行ってきたのかというのを御紹介させていただきたいなと思っています。

私がSPACEを立てたのは3年前になるんですけども、SPACEを生むきっかけになったROCKETというプロジェクトがございます。こちらは2014年から日本財団さんが支援をしてくださって、東大先端研で行ってきた事業になります。ROCKETというのは、志と特異な才能を持った子どもたちが集まる部屋というところで、その当時、まだ11万人だった不登校の子どもたちの中には、本当は学校にはなじみづらいんだけど、自分の好きなことを思い切りやっていくというところで力を発揮することができるような子どもたちがいるんじゃないだろうか、そして、今、閉塞感のある日本の社会をそういった子どもたちがもしかすると希望を持たせてくれる、打破してくれる状況は生めるんじゃないだろうかというところで生まれたのがROCKETです。

学校の枠組みに子どもたちの認知特性であったりですとか、こだわりの強さでなじみにくいというところがあったんですけども、そうした子どもたちが、教科書がなくなったら、時間割がなくなったら、さらには目的さえもなくなったときにどんなふうに学びを始めるんだろうかというところで、大きな社会実験のような形で、子どもたちの情熱と好奇心を軸にしながら、つくってきたのがこのプロジェクトかと思っています。

プログラムを日本の61市町村、そして海外にも広げて、旅をするように、旅先で子どもたちと寝食を共にしながら、様々な地域のリソースを活用していただきながら、つくらせていただいたのがこのプログラムでした。約370個のプログラムを実施しまして これだけたくさんのプログラムが必要だったのは、子どもたちに合わせていく必要があったから

なんです。それほど一人一人、本当に異なる才能、特性、感覚の感性やセンサーを持った子どもたちが集まったというのがROCKETでした。

私が彼らから学んだことは、本当に人は一人一人違う、本当にこだわりが強く、学校では先生方も困らされていたんじゃないかと思うような子どもたちもいましたし、学習障害、読み書き障害、発達障害という名前がつく障害を持っている子どもたちもいました。ただ、障害有無にかかわらず、本当はどの人たちもそれぞれに感性の違い、感覚の違い、そして、興味関心の違いや度合いの深さと広さというものをそれぞれの人たちが持っているんじゃないか、そこは特別に生まれたからではなくて、一人一人が持っていることであって、彼らが、少し程度が強くなってしまった、今の学校の中で少し合わないところが大きく出てしまったからこそ、学びを多様にしていくということを教えてくれる存在として、学校ではないところに学びを求めていった状況を私は彼らから教えてもらったなと思います。そして、好きなことをとことん追求し、試行錯誤できる場と時間、そして、その機会を提供したのがROCKETです。

彼らを見ていると、彼らが特別なのではなくて、与えられている時間を何に費やしていくのか。自分を生かすために費やしたときには、おのずとそれは茨の道かもしれませんが、決まったルートの道ではないかもしれないけれども、そこが開けていく姿を彼らが見せてくれて、なおかつ、ユニークネスというもの、唯一無二の自分の存在を確立していくのは、もしかすると人がやっていないことを自ら突き詰めていった先に生まれるものなんじゃないかということも教えてもらいました。

異才という言葉が持つイメージは強く、異なる才能と言ってしまうと、一人一人が違うということがもちろん前提にあるんですけども、どこか違う人という感じの分断が生まれてしまうことがあったんです。なので、私はそうではなくて、一人一人の中にあるもの、もともと持っている個才という、個人の中にあるものが発現していくというところに学びを変えたいなと思ひまして、異才から個才へという価値観で、今、活動をSPACEに変えています。ポケットから旅立っていく、飛び立っていくSPACEの意味もありますし、好奇心と情熱を核に置きながら、その人たちがそれぞれの好奇心、情熱のままに好きなことをやれるような環境を受容していく社会が来たときに、個別最適な状態、一人一人が生かされている状態が生まれるんじゃないかという願いも込めて、SPACEと名づけています。

SPACEでやっていることといいますと、親御さんも学校の先生も町の人たちもみんな

な一人一人違うということは理解していながらも、それがいつか社会規範であったり、ルールの中では同じようにしようというところがどうしても同調圧力のように働いてしまう瞬間があったりすると思うんです。そのときに、改めて私とあなたはどのようなふうになるだろうか、私自身もどのような状況によったら、どんな変化を遂げるのだろうかというのをもう少し見える化したほうがいいんじゃないかというところで、今、アセスメントというものを作って、子どもたちに提供しています。これは、体重計に乗るように、どんな環境、どんな人に会った後に、どのように興味関心が変わるのか、そして、今、会場がちょっと暗くなっていますけれども、この会場を暗いと感じていらっしゃる方もいれば、明るいと感じていらっしゃる方もいるかもしれない。同じ環境の同じ刺激を受けている人であっても、感覚として捉えるものがそれぐらい違うんだというところを見える化したときに、初めて学校の中での物理的な環境を調整することができるかもしれない。学校の中で難しければ、外に出ていくところで子どもたちの学びを保障するような、子どもたちに合った環境を提供できるかもしれないというためのアセスメントになります。

体重計もそうなんですけれども、自分の健康状態を知るということは、体重計で体重が増えた減ったという目安で見えていくことができると思うんです。ただ、根本的な、例えば病気になったときには病院に行かないといけないとか、日々健康に気をつけようと思ったら、ジムに行かないといけないというように、体重計で全てが分かるわけではありません。自分の状態がどんな状態であるかということを知るためのきっかけとして、私たちはこのツールを使っていて、そのツールというものが、過去の自分、そして、今現在やらないといけないと思っている勉強とか部活とか共にやりたいなと昔思っていた自分の中にある好奇心とか情熱を比べたときに、どんなふうには自分は変化してきたのかという、現在の自分を捉えるということを通して、ありたい未来、将来こういうふうにはなっていきたいということを含めて自己理解していくためのアセスメントになります。

今、学校の中にも入れさせていただいているんですけれども、これを通じて子どもたちの立場が変わってくるんです。子どもが自分自身の特徴を知ることによって、子どもがやりたいこと、合う環境はどんなものなんだろうかと考え始める、これがまさに学習環境をつくっていく主体者になるという、子ども主体の学びへの転換にも役立っているように思います。そして、学校の先生方、保護者の皆様も、この子がこういうことに興味を持っていたと知らなかった、こんなことが得意だと思っていたんだけれども、こういう背景があって、これが好きだったのかもしれないと子どもたちの多様な姿を受容しやすくなるとい

うお声なんかもいただいているところです。

そのアセスメントなんですけれども、先ほど言ったように、体重計のようなものなので、それが分かったところで、どんなふうに自分を生かしていったらいいんだろうかという環境とセットでないと役に立たないんです。今、自治体さんと御一緒させていただいて、子どもたちが個才を自分自身で知るといことと、たくさんの環境の中で、どんな環境だと、自分はその環境がよりフィットしているんだということが分かるように、環境と自分自身をマッチさせていくようなプログラムをかまくらULTLAという中で提供させていただいています。

ULTLAの中では、まず知る、そして、自分らしい学び方を試すというプログラムを提供しています。プログラムの中で、様々な分野のナビゲーターの人たちが話をしてくれたり、実践をしてくれたり、自分自身で実験をしてみたりと繰り返しながら、その中で、面白かった学びの形を自由に表現して、その繰り返しの中で、自分がどんなふうに変化していくのかというところを一連で、子どもたちが成長していく機会をつくっているのがかまくらULTLAになります。

かまくらULTLAでは、学びがどのように変化しますと、ちょっと小さいですけども、左に書いております。学びの主体者は子どもたちになり、教育教室が学校の外にまで広がり、地域の多様な場所を学び場に、例えば鎌倉であれば、森、海、お寺、企業といったところにまで拡張するという形です。先生は、地域内外のエキスパートの方や住民がナビゲーターという形で、楽しい探求の芽を与える役割をしてくれる方になります。そして、学習内容も、教科横断、学年縦断的に、地域のリソースを教材にしながら、教科の単元に結びついていく。自分の体験から学んでいく学びなので、本当に自分事化した知識に落ちていく学びのつくり方をしています。森と海というリソースを使いながら、自分で発見をしていくということをやっています。探求の視点というものが世界の見え方を大きく変えるきっかけを与えてくれるんです。そのきっかけのつくり方を鎌倉のプログラムの中に入れながら、広がり、深まりが出るようなデザインを行っています。

今日、せっくなので、動画も見ていただきたかったですけれども、時間の関係で割愛させていただきます。

鎌倉の子どもたちは、3年以上家から出ていないけれども、この場だとすごく安心できるからということで、出てこられるようになっている子どもたちもいます。そして、最初、期待とか不安が大きかった子たちが、期待、そして、やりたいと思う意欲が上がり、不安

と緊張が下がっていくということなんかも効果検証の中で得られております。

それはひとえに学校という学び舎が子どもたちの学びのホームになり、ホームがあるからこそ地域に出ることができる、そして、地域に出ていったときに、自分の興味関心を仕事にしていらっしゃる方、専門としてお話をしてくださる方、体験ができることで、頭では分からなかったけれども、実感として腑に落ちていった瞬間があったとか、それを通して自分の表現ができたとか、チャレンジの機会を地域の中に増やしていく、多様な学びの試行錯誤の場所が増えることで、彼らに生きていく学びがつけられているんじゃないかなと思います。鎌倉であれば森と海なんですけれども、日本の各地は、本当に様々な地域資源、地球資源がありますので、そういったものを生かしていくことで、多様な学びというのは全国で展開することもできるんじゃないかなと思っています。

少しだけ御紹介させていただきたいのが、これはG O D H A N D Sプロジェクトというものです。学びと仕事ということで、より仕事にフォーカスを当てながら、人は地球と共存しながら、どんな技を使って、どんな知恵を使って材料を調達して、文化をつくるためにどんなものをつくってきたかという匠の技にフォーカスを当てながらやっているのがこのプログラムです。

型はあるんだけど、答えがないというところに、子どもたちのチャレンジしがいのある余白があると思っています。この中でも、自分自身を知り、G O D H A N D Sで匠の人たちのすごさに触れ、そのすごさとか、まねをしたいと思ったことを自分に取り入れていく、そして、自分が少しアップデートされるという、守破離という日本の考え方がありますが、守破離と心と体と頭がどのように変化していくのかというところを組み合わせたプログラムなんかも、オンラインとリアルの両方を含めて提供させていただいています。そのことによって、古来からの地球資源との付き合い方、そして、その土地、人、時間に愛着を持つにはどんな方法があるんだろうかと町の人たちと共有しながら、それを引き継ぎ、生きる喜びを感じる子どもたちがあふれる未来につながっていくきっかけづくりなんかもしています。

最後なんですけれども、今の時代、その部分を地域の中で育てるということだけが今はI C Tの時代によって、地域の中だけではなく育てていける可能性自体が増えたと思うんです。私たちも外に出ていけることによって世界が広がる。世界が広がると、自分が生きている世界が小さな世界だったということを知って、仲間を見つけに行ったりだとか、自分のやりたいことが外で見つかっていくという、チャンスを増やすことになると思って

いますので、このようなコンテンツなんかも作りながら行っています。

子どもの数だけ、個才の数だけ興味の幅は無限にあると思うんです。子どもたちが興味を広げたり、深めたりする環境の選択肢をどれだけ私たち大人の中、社会の中でつくっていくことができるのかが教育の役割なんじゃないかなと思っておりますし、また、地域に今まであったものが、いろんなコンテンツとして学びの教材になっていくことで、地域の文化や産業が新たな時代の必要な形に再編集されたり、翻訳されることで、新しい学びがつけられるとともに、その地域に文化の担い手として子どもたちが入ることで、新しい文化に息が吹き込まれるような循環が生まれてくるんじゃないかなと願っています。

本日、「新たな学び」ということなんですけれども、個才を生かしていくというところで、少し実践のお話を御紹介させていただきました。

拙い御説明もあったかと思うんですけれども、御清聴どうもありがとうございました。

(拍手)

司会 福本様、ありがとうございました。

福本様におかれましては、後ほど区長と教育委員会との意見交換会においても、ゲストとしてお話しいただきます。今、短い時間でしたので、多分、お話が足りなかったと思いますし、皆さんもお伺いしたいかと思っておりますので、改めてお時間を取りたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、御覧の皆様にご案内いたします。この後、10分程度の休憩を予定しております。休憩時間に御質問を集めさせていただきます。会場で質問票に御記載いただきました方は、入り口付近の会場係員にお渡しください。オンラインの方は、ZoomのQ&A機能により質問をお寄せください。

それでは、次は13時40分から始めたいと思っておりますので、その時間まで休憩をさせていただきます。よろしく願いいたします。

(休憩)

有馬政策経営部長 それでは、お時間になりましたので、再開させていただきます。

多数の御質問をいただき、誠にありがとうございます。

ここからは、区長、教育委員会による意見交換会を行います。先ほど御講演いただきました福本様にも御参加していただき、これまでの御経験や独自の視点からの御意見を伺います。皆様、よろしく願いいたします。

それでは初めに、本日御欠席の坂倉委員の事前収録の動画を流させていただきます。そ

の後、福本さんの基調講演と坂倉委員の動画を踏まえて、順次、御意見をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、準備をよろしくお願いいたします。

坂倉委員 皆さん、こんにちは。東京都市大学の坂倉です。

今日、総合教育会議を欠席させていただいて、大変申し訳ございません。恐縮ですが、ビデオにてコメントさせていただきます。よろしくお願いいたします。

教育大綱に向けてということなんですけれども、世田谷らしい教育の在り方を皆さんで議論してまとめていけると一番いいなと思っております。

私は、東京都市大学でまちづくり、コミュニティーの研究、実践をしています。大学のある地元、尾山台は、かつて尾山台小学校にいらした渡部教育長や、地元の商店街、小中学校、いろんな方々と一緒に、地域の課題解決というよりは、いろんな人のやりたいとか、楽しいを重視して、つながりをつくっていく、その中からいろんな人が学んで、新しい活動を起こしていく、おやまちプロジェクトという活動をやってきております。

今日は、その経験、プラス、先日、教育委員の皆さんと一緒に徳島県神山町というところに視察に行かせていただきましたので、その経験も踏まえてお話ししようと思っております。

改めまして世田谷らしい教育の在り方ですが、今日はこの3つを主にお話ししようと思っております。

まず、観客からプレーヤーということなんですけれども、世田谷区は保坂区長が観客からプレーヤーへまちづくりを観客として見ているだけ、あるいは、要望を言うだけではなくて、町をつくる、公共サービスをつくる舞台に上ってきて、みんなでつくろうよというかけ声をずっとされてきていて、その影響もあって、世田谷区というのは、多種多様な、様々な個性を持った方々が本当にエネルギーに活動する、全国でもなかなか類例のない地域になっていると言っていると思います。

教育も世田谷らしさということで言うと、学校に全て要望してやってもらうのではなくて、あるいは、学校に結構文句を言う人、クレマーの人がたまにいらっしゃいますけれども、そういう態度ではなくて、プレーヤーとして、みんなで教育、学びをつくっていくという町になっていくといいなと思っております。

意見を聞いてつくろうということはもちろんやっていますけれども、それだけじゃなくて、小学生、中学生を含めて一緒につくっていく、意見を聞くだけじゃなくて、共につく

るというプロセスを大事にしたいです。いろんなものをつくっていく過程に参加することが、一人一人の自己効力感とか、ウェルビーイングの向上にもつながっていくと。こんなことができると、本当にいろんな居場所というか、多様な学びの在り方とか、いろんな子たちの選択肢を学校だけが用意するんじゃなくて、みんなで作っていきような町になっていくといいなと思っています。

それから2つ目が学び舎単位の循環コミュニティなんですけれども、神山町で教育委員の皆さんと一緒に考えて、共有できた視点です。なので、神山町のお話をちょっとだけ紹介しようと思います。

神山町は徳島県です。市内から1時間ぐらいの人口5000人ぐらいの山あいの町です。神山町自体は、ワーク・イン・レジデンスとか、サテライトオフィスとか、主にIT業界の誘致をすることによって地域活性化を成功させているということで、最近では有名なんです。我々も見学に行きましたけれども、例えば神山まると高専は、この4月にできた学校ですが、神山まると高専はSansanというIT企業の寺田さんが発起人になってつくった、テクノロジーとデザインを15歳、高専に入学するところから学ぶ、そして、起業家精神も一度に学んで、人間の未来を変えていこうという野心あふれる学校です。

なので、すごくとんがった、エッジの効いたところが有名ではあるんですけれども、神山町はそもそも山あいの町で、人口がどんどん減っている、消滅可能性都市の一つでもあります。将来的に町をつないでいくためには、人がちゃんといるという状態を維持しないとイケないです。

神山町の特徴は、とにかくたくさん人を増やすのではなくて、将来的に安定できる無理のない規模を算出して、すごく面白いのが、そのために必要なのが子どもの学年当たりの人数なんです。神山町では、1学年20人以上の子どもたちがいる町を維持できれば、将来的にも3000人ぐらいの規模になっていくのではないかという推計、仮説の下、まちづくりをしています。

そのためには、まず人がいなきゃいけないんですけれども、住むところがあることはすごく当たり前のことなんです、その次に来るのが、いい学校と教育があるということなんです。よく地方創生だと、仕事をつくらなきゃいけないんだと言われますけれども、それ以前にいい教育と学校があるということを町の目標に掲げています。学校は、小学校が2つ、中学校が1つ、幼稚園、保育所、最近では、自主的に保育をする活動なんかも生まれています。あと、県立の高校生、さっきお話しした私立の高専があるという非常に小さ

い規模なんですけれども、小さい規模であるがゆえに、町の中で教育、いい学びがあるということがすごく大事だと明確にコンセプトとして打ち出しているのが、地域の創生事業のありとあらゆる事業が日々教育とか子どもたちの学びにつながって実施されています。詳細について御紹介する時間がないんですけれども、高校から小中学校をいろんなまちづくりの事業に連携させながら進めているというのが非常に特徴的です。

こうしたことは小さい5000人の町だからできるということは非常にあるので、東京のような大都市で日々学校が農業とか林業とか産業とか商業に全部つながって、その循環が実現しているというのはなかなか想像しにくいんですけれども、教育委員の皆さんともお話ししたのが、世田谷は90校も学校があって、なかなか無理だろう、でも、逆に学び舎単位で中学校区に絞って考えると、私の地元の尾山台だって神山町と全く一緒で、中学校1つと、小学校が尾山台小と玉堤小の2つです。この中学校区、学び舎単位に絞って、世田谷区だと約90万人を30で割ると3万人ぐらいの人口になってくると思いますが、この範囲でいろんな人が関わりあって、いろんなことをつくっていく、学び、教育を一緒につくっていくことは決して無理ではないんじゃないかなと可能性を感じました。

ということで、学校から地域を見るというよりも、地域の全体の中で、教育がどういうふうにつながっていくのか、そして、町につながっているからこそできる教育の在り方とはどういうものなのかを考えてつくっていくという視点がすごく大事なんじゃないかなと思います。そして、学び舎単位の小さな地域で、ありとあらゆる分野の活動と教育が相互につながって、それがぐるぐる循環していくようなコミュニティというのは、東京のような状況でも、とにかく小さく始めるということを重ねていくとできていくのではないかなと思いました。

最後に、やったらええんちゃうなんですけれども、これは結構掛け声みたいな感じなんですけれども、実際にそれを動かしていくための私たちのマインドとしてどんなものが大事なのか。これも神山町から学んできたことなんです。

実は神山町というのは非常にいろいろな活動をしていて、今でも町役場と連携してやっていますが、そもそも最初に始めたのは、PTAのおっちゃんたちなんです。PTA会長のお父さんたちが集まって、いろんなことを始めた。しかも、自分たちがやってみたいこと、わくわくすることをやっていくためには、どういうふうにやっていったらいいのか。こんなことから始まったのが神山町の地方創生です。

90年代から大南さんを中心にいろいろな活動をしてきて、NPOグリーンバレーを立ち

上げて、そこからいろんなアーティストやIT企業の誘致が始まっていくと。これが巡り巡って、町役場の地方創生の事業につながって、今では役場と民間の人が第三セクターでつくった神山つなぐ公社が地域づくりの核になってコーディネーションしてきました。

ここから学べるのは、大南さんをはじめ、PTAのおっちゃんたちが自分たちがやりたいことをどんどんやっていく、そして、それが面白いねと集まってきた若い人たちを受け入れて、どんどん応援して、若い人がやりたいという背中を押していく。こういった活動がどんどん積み重なって、いろんな企業が集まってきたり、高専ができてきたりということが実現してきました。

グリーンバレーで大事にしてきたコンセプトが2つあって、1つが、できない理由よりも、できる理由を考えよう、それから、とにかく始めよう、失敗を恐れてとか、前例がないからということじゃなくて、やってみよう。これを徳島弁で言うと、やったらええんちゃうんですけれども、この掛け声は、神山に集まってくるいろんな人たちの勇気につながって、背中を押されて、いろんなことが起こっていくということになっています。

ここから本当に大事だなと思います。私たちは子どもとか若者にどんどんやれというふうに一方的に変えるのではなくて、探究学習も、子どもに探求させるというのはもちろんそうなんですけれども、それ以前に大人も探求しないといけないんじゃないかと思うんです。子ども・若者を頑張れと励ますだけでなく、失敗とか変化を恐れない風土を年長者から実践して伝えていくということも重要なんじゃないかなと思います。

世田谷というのは、まちづくりの分野からいっても、教育の分野からいっても、すごく革新的ないろんな取組をしてきた先人がいっぱいいる町だと思うんです。改めて世田谷らしい教育ということを考えると、どんどん若い人のやりたいを応援して、チャレンジできる町、教育環境になっていくといいなと思います。

ということで、ちょっと長くなってしまいましたけれども、私からのコメントは以上になります。どうもありがとうございました。よろしく願いいたします。

有馬政策経営部長 それでは、先ほどの福本様の講演と今の坂倉委員の御発言も踏まえ、各委員からそれぞれ御自身の御意見等を伺えればと思います。

初めに、区長からお願いしてよろしいでしょうか。

保坂区長 お二人とも非常に面白いというか、今の学校なり教育の中で、本当に語らなければならない問題を出してくれていると思いました。

福本さんのお話の中では、ROCKETというプロジェクトを通して、一人一人のお子

さんたちの違い、特に教科書や時間割や目的を持たないというのは、私たちが常識的に知っている学校教育とはある意味で対極にあるわけで、好きなことをとことん提供というあたりは、具体的にいろいろメディア等で見えてきたことがありますけれども、今の学校の中でも、あるいは、かつての学校教育の中でも、あるいは、かつての子どもの遊びの中でも、好きなことをとことん熱中してやる、時間も場も忘れて徹底してやると。そこには熱い、体が燃えるような体験があり、そういうものが刻印されていって、自己肯定基盤みたいなものにつながってきたかなとも思うところがありました。

では、これをどういうふうに 町に出ていって、鎌倉でいろいろやられたという話ですけれども、世田谷の町の中にも、子どもにとってみれば本当に興味をかき立てられるような人だとか場だとかというのがあると思います。そういうところを生かしながら、町が丸ごと学びの場になるみたいなお話は、もうちょっと具体例を聞きたいなとも思いました。

神山町の話をお話を坂倉委員がしてくれましたけれども、今、特に1つの時代の変り目だと思うんです。とにかく出来上がったもの、今あるもの、行政や学校の意味もそうかもしれないですけれども、そこに対して、子どもたち、親たちも含めて一緒に新たな要素をつくり出していく、コミュニティーの中でどんどんやってみようというのが学び舎単位でやれたらどうかという問題提起は非常に 教育長がやってきたおやまちプロジェクトは、坂倉委員も初期から担われてきたということで、実際にやってきた坂倉委員が気づいたというか、神山町との関係で、世田谷区の中での学び舎というつながりの中で始められることということでまとめられたのは非常に面白かったと思います。

今の私たちが立っている課題というのは、不登校のお子さんたちが1500近く、1.5倍とよく言われていますけれども、世田谷区も全国平均と多分同じような上昇曲線にあり、多くの子が学校に行けなかったり、教室に入れなかったり、学ぶということについてなかなか難しいという状況があり、教育委員会や区でほっとスクールや不登校特例校とかをつくってきているけれども、まだまだその場に来られないというか、キャパシティーがありませんから難しいという中で、新しい学びの場が必要ではないかという議論もこの会議でしてまいりました。

同時に、実は不登校のお子さんたちだけが問題を提起しているわけではなくて、学校に毎日通って、それなりにクラブ活動とか学校の日々を過ごしている普通の子、あるいは、なかなかよい子と言われる子の中にもいろんな問題が蓄積されていて、特にコロナの3年間の間で、この社会自身がぎゅっと縮んだ中で子ども自身のストレスというか、未来が

見えない、未来が非常に暗いんじゃないかというような 実際、環境問題とか気候危機なんかを考えると、鋭敏な感性である子どもたちにとっては、そういうふうに思うのが当たり前なんですけれども、要するに、正解のない問いかけというのが今本当に必要なんですけれども、それに関して、私たちは十分応えられていない、じゃ、どうやったら、大きな時代の転換期に学びの質の転換をしたらいいのかということを経済大綱に書くというのはなかなか難しいんですが、一生懸命つくりたいと思います。

以上です。

有馬政策経営部長 ありがとうございました。

続きまして、澁澤委員から御発言いただいてよろしいでしょうか。

澁澤委員 ずっと幅広い視点でお二人からお話をいただいたと思うんです。両方とも共通しているのは、子どもという視点から新しく教育を見てみようということなんだと思います。

それを見たとき、例えば今日の入り口であった不登校という言葉ですけれども、不登校というのは、あくまでも大人の側、社会の側から学校に出ない子どもたちのことを不登校と言っているの、子どもたちから見たときに、それは学校という場が1つのチョイスの場であり、行かないというチョイス、あるいは別の教育を受ける、あるいは学校に行きながら別のやりたいことをやっていく、いろんなチョイスの可能性があるんだろうと思っています。

それをどう伸ばしていくのか。今、最後に区長もおっしゃっていましたが、問題を読んで、それを理解して、正解を書くという能力を身につけるために学校に行くんだと思っている大人の側の昔からの思い込みが多分一番邪魔をしているのかなと思っています。

この間もチャットGPTのことが随分社会の中でも話題になるようになりました。その能力というのは、これからAIが幾らでもやってくれる能力であって、むしろAIに対して、どういう問いを発するかという自分らしい視点だとか、ものの把握力ということを問う時代になってきているなど。

そうやって子どもたちの側を見てみると、例えば中学へ行ったら、教科担任制になっていきますから、あなたは今日は理科です、これからの時間は社会で、その次は数学ですと言われますけれども、子どもにとって関心があることから見れば、ひょっとしたら、理科、社会、数学とかという境界線はない課題のほうがはるかに多い。つまり、今の教科主義と

いうのも、ある意味では大人の側から子どもに押しつけている　押しつけていると言ったら表現は悪いかもしれませんが、与えている価値観であるし、そんなことを言ってしまうと、例えば学校の学年ごとにある、知識を取得をしていかなきゃいけない学年制度ですとかクラス制度も、子どもの視点側から見られるようにしていかなければいけない。その意味では、区長がおっしゃったように、教育のものすごく大きな変革期だと思います。

もう一つは、私は自然科学をやってきた人間ですので、自然科学の側から見ると、人間というものは、そもそも森の中で暮らしていた。猿と共通の祖先を持つある種が森から草原に出てきて、そして、その中で集落を作り、あるいは子を作っていたという歴史があります。森から草原に出てくるとき、人間は裸の猿でしたから、1つのコミュニティーをベースとして、とにかくみんなで助け合う。現に人間の脳が最大に発達した時期というのが、集団で子どもを育て始めた時期であって、私たちが言語を持つ時期よりも、私たちが集団で子どもを育て始めた時期が一番人間の脳が発達している。つまり、それだけ人間の知能領域においては、集団でコミュニティーの間でつながった中で子を育てていくということがとても重要なんだと思います。

その意味では、学校という場、クラスという場は、子どもたちにとっては居心地のいい場所であるはずである。子どもをどうやって伸ばしていくかということと、人と関わりながら、その中で自分らしさをつくっていく。確かに自分らしさという言葉自体が相手がないと存在しない言葉であって、相手との対話、あるいは相手との協働を通して、自分らしさを見つけていき、自分の生きるまさにウェルビーイングの心のベクトルをどう自分らしくつくっていくか。そういうような子どもたちの環境をどう捉えていくかという視点から、学校であり、クラスであり、地域であり、学び舎でありというものをもう1回見詰め直して、整理し直してみるという時期に来ているのかなと深く感じさせていただきました。

有馬政策経営部長　ありがとうございます。今お話の中で、子を伸ばすためには集団も大切というのがすごく勉強になりました。

続きまして、中村委員、学校の立場から御発言いただけますでしょうか。

中村委員　この間、今までというか、私の子育てのときもそうでしたが、多くの子どもが学校、習い事、それから、中学生、高校生であれば部活動、その3種類のプログラムがほとんどだったんじゃないかなという気がしています。一方で、うちの子育てのときもあったんですが、子どもの中では、部活に入っていないとみっともないというか、帰宅部だ

と何か恥ずかしいみたいな意識も一部あったようで、無理無理に部活動に入っているなんていうケースも、自分の子ども以外にも見られたことがありました。そんなような状況で、我々の側としては、大人の側から学校と部活動と習い事の3種類のプログラムしか子どもたちに提供できていなかったというのが今までだと思います。

今、福本さんのお話もありましたが、私自身も教育委員会の中で御紹介したのは、例えば横浜の青葉区では、あおば未来プロジェクトといって、子どもたちが最終ゴールは区長に政策提言をするというプロジェクトをやっているところもあります。そういった形で、地域の中に多様な学びの場をつくり、その中で、子どもが学んでいく、成長していくといったことがこれからは求められていくんだと、この間、非常に思っています。

まだまだ大人もそうですし、むしろ大人がそういう意識を植え付けちゃったのかもしれないですけども、学校、部活、習い事のどれかに入っていないと駄目だみたいな風潮というか、風土というものは、これからどんどん薄めていって、地域の中に多様な場をつくるのが本当に求められていると考えております。

横浜では、サードプレイスという言い方をしています、サードプレイスの必要性が私が随分前に読んだ、例の襲撃された宮台先生の論文の中にも、第4の場所が若者には必要なんだと書かれていたことがあります。それは当時、渋谷にたむろする若者の実態を宮台先生が調査して、今の若者は第4の場所を求めている、だけれども、それはもっと健全なものであるほうが望ましいわけです。ところが、今、新宿の歌舞伎町辺りでトー横なんていって、また似たようなことが繰り返されています。我々大人のほうで子ども、青少年に学校以外に健全な場所またはプログラムをこれからどうやって提供していけるのかというのは大きな課題かなと考えております。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。確認ですけども、地域の中に多様な学びの場というのは、特別な子ではなくて、小中学校に行っている子たちとか、いろんな子が地域の中でも活動できるという意味でよかったですでしょうか。

中村委員 はい。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

続きまして、鈴木委員からお願いしてよろしいですか。

鈴木委員 まず、福本先生、御講演ありがとうございました。先生の話の伺いながら、私は保護者ですので、保護者目線ということいろいろ考えてみました。子どもが主体的になる余地をどうつくるかが保護者や大人に向けて問われているのかなと思いました。大

人たちがよかれと思ってしていることが、実は与え過ぎていたり、準備をし過ぎていたりすることが往々にしてあります。子どもたちは、ある一定の知識やスキルがあれば、大人が思っている以上に自分の力や知恵でできるものです。大人は子どもに何と深く関わらせたいのかということをよく考えて、主体的に学べるようにする必要があるなど思いながら聞いていました。答えを与えてしまうということは、子どもに学ばせようとしないうことと同じなのかなという気持ちにもなりました。

先生のお話を伺っていて、私の中で4つ、これかなと思ったことがあるのですが、質のいいヒントこそがまず大事で、2点目が子どもが挑戦する状況をつくるのが大切、3点目が子どもに任せる、そして4点目が、大人も全部含めてですけれども、結局、学びは1人では成立しないのかなと思いながら伺っていました。こういう先生からのお話を聞いて、深い学びを得るためには周りの環境を非常に整えることも大切なんだなと思っておりました。

次に、神山町の先ほどのお話しです。こちらに伺ったときに、PTAのおっちゃん先ほどもそのキーワードが出てきましたが、PTA活動から、その枠を超えて、地域創生、最先端地域、持続可能な地域をつくる活動へと活動を発展させていった取り組みは大いに学ぶところがあり、また、PTAに対しての希望を見たような思いでした。

PTA会長のおっちゃんたちが立ち上げた時代は30年ほど前ですけれども、今とは違い、まだPTAに体力と気力があつた頃だと思います。昨今のPTA活動の低下を鑑みたときに、今の時代で同じようなパワーがある人が存在するだろうか、正直不安は感じます。しかし、このコロナ禍で停滞したコミュニティーの再構築を望んでいる保護者も少なからず存在しているはずなので、特に世田谷はPTA活動が活発でしたので、そういう方は多くいると思います。だからこそ、PTAの在り方や立ち位置をいま一度考えて、地域コミュニティーでの役割を考えるチャンスだと考えています。また、それに対して行政がどのように関わっていくか、働きをしていくか、検討する課題の一つだと考えています。

神山町との自治体の規模の違いはありますけれども、世田谷区も今までのように右肩上がりの人口増加は見込めませんので、特に子ども・若者世代が減少していくことで、神山町と同じような状況になっていくのかなと感じると、町の未来を創造するために教育というのは大きなコンテンツであると思っています。

新しい学びの実践に向けていろいろ考えたときに、子育て現在進行形の保護者にとっては、自ら経験をしたことのない教育は不安のほうが大きいと思います。しかし、結局のと

ころ、学びに対する保護者の意識改革が新たな学びを実現する一番のきっかけになるのではないかなと考えています。

以上です。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

では続きまして、教育長からお願いしてよろしいですか。

渡部教育長 福本さん、坂倉さんの話からは大変刺激を受けました。

この話の前に、先ほど澁澤委員がお話をなさっていた、相手との協働の中で自分らしさを発揮したい。子どもたちはそういうふうを考えていると思うんです。自分が個人で自分らしさを発揮するのではなくて、やはり協働の場の中で自分というのを発揮していきたい。そういう環境をどう整えていくかと澁澤委員がおっしゃっていて、私も全くそのとおりだと思いました。ここがどう機能するかということが重要になっていくんだと思います。

福本さんの話の中で、個才を生かすという話があって、個才を生かすために、現場ではどのようなことが必要なのかの話小さくわかりやすくして、学校現場を預かっている身からお話をさせていただきたいと思います。

先ほど福本さんの話の中で、個才の数だけ興味の幅は無限だとか、マッチングの機会を増やすとか、自分にフィットするものを見つけていくというお話がありました。ということは、子どもたちの個才をそういう現場で生かすためには多様な選択肢が必要になってきます。今まで学校の現場の中では、みんなが同じようなことをするということが一般的でしたから、選択肢を広げていくということが難しかったのかもしれませんが。みんなが同じことをしていくということに慣れている現場では、この考え方を広げることが必要になっていくと思います。

1枚スライドを用意してきたんですが、ねいろの今の取組の中にヒントになる言葉があると考えています。

まず授業ですが、希望すれば、学年相応ではなくて、自分のやりたいところから学習ができていくということです。これにはデジタルも活用していくことが必要です。

不安が募ってきたらどうするのかというときに、事前にどうしてほしいかということを確認しておくということです。例えば、これからどこか校外学習に行ったり、遠足に行ったりするときに不安が募ってきたら、写真を送ってほしいとか、オンラインで実況してと言ったり、または、そこで認定証みたいなものがもらえるんだったら、それは欲しいと言ってもらおう。それから4番目、大事なことです、お構いなく。今日は自分はそれに行く

気分でもないし、今はそれじゃないことをやりたい、お構いなくしてください。こっちから誘ったりはしないことも大事です。このように子どもたちが表現してくれば、こちらとしても非常に分かりやすいです。

ねいろの取組では、登校が難しい子どもは、図書館に來たり、裏の公園に來て話をする、個別にお話をするとか、交換日記をするとかが選択できます。最後が一番重要なんですけども、どうしたい？ 実はこれがなかなか難しいんです。自分からどうしたいということが言える子どもは、それをそのまま伝えることができるので、私たちはそれに対応していけばいいんですが、そこが難しいので、こういう案をいろいろと出していきます。これでどれにする？と話していく。

これは最初にねいろをつくる時に考えた考え方です。

これは人数や、場所のことがあったり、限られてできることかもしれません。授業にしてもそうです。学校の中で、または学びの中で、多様な選択肢を用意するには限界があるとも思っています。

では、どうすればいいのか。地域の中で、社会の中で、登校ができない子どもなどを受け入れることができていくといいのかなと思っています。学校という枠組みの中では、活躍が難しい子どももたくさんいます。福本さんの話の中にも出てきているような場所も社会全体、地域全体でできていくといいのかなと思っています。

神山町は私も一緒に行ってきました、非常に刺激を受けてきました。そこは地域の中全体で学びということを考えていました。学校の現場にいと、学校だけで学びを考えてしまうことになってしましますが、本当は地域の中の学校なので、学びはどんどん広げていける、枠がないんだという考え方に基づくともっと柔軟に考えていけると思っています。学校で困ったりしないで、学びというのはもう少し自由に考えていけるといいのかと今思っているところです。

以上です。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

福本様はかなり質問が出ていまして、先ほどもちょっとお話ししたんですけども、本来だったら1時間ぐらいお話しいただくところ、かなりコンパクトにしてしまって申し訳なかったんですが、御質問としては、具体的に地域、企業とどうやって連携するのかとか、また、そこで学んだ方々をどうやって職業に結びつけていくのかとか、区長も先ほど町が丸ごとというお話をしましたが、そこら辺について具体的に教えていただいてもよろしい

ですか。

福本氏 ありがとうございます。3点ほどいただいたかなと思うんですけども、1点目、先ほど言っていたのは何でしたか。仕事につなげていくという……。

有馬政策経営部長 最初は、地域、企業とどうやって連携するのかです。

福本氏 地域、企業との連携なんですけれども、鎌倉の場合は森と海というところで、特に海の関係の方々、そして森の中ではお寺関係の方々、地域の中にいらっしゃる方々がおられたんです。教育委員会さんからも、この辺に漁師さんがいらっしゃるから、漁師さんのところに行ってきたらとか、このお寺の方が教育委員なので、教育委員のお話も聞きに行かれたらと教えていただきました。

地域の中に外から入らせていただくと、外から入ったことによって、地域の中で活躍をされていたプレイヤーさんたちが、実はお互いのことを認識していながらつながってなくて、でも、子どもたちの学びは一緒につくりたいと願っていらっしゃるという状況が見えてきたんです。例えば森だと、お寺の建築を学ぶということもできますし、骨格というところで、自分の体とくっつけて、ボディーワークをやっていくということで、心につながっていくことを体から学んでいくことができるプログラムにもつなげていけるんじゃないかというところで、やってくる子どもたちが何を望んでいるのかということをも把握した上で、地域の中でヒアリングをさせていただきながら、その興味と心理的な状態に合わせたものをピックアップするということを実は鎌倉ではやっています。

なので、森なんですけれども、ずっとお寺の中の物語を探求の題材にしているわけではなくて、水をテーマとして扱ってみたりですとか、コンテンポラリーダンスの方に来ていただいて、体を使ったワークをしていくですとか、お寺の中にある素材として、りんを鳴らすと音がありますけれども、音を使って人とつながっていくためにはどういうふうにしたらいいのかということができる人が地域の中にいないかという視点で、子どもたちがどんな領域に興味があるのか。不安が大きい子たちが多いのか、それとも、すごく探求したいんだけど、学校の中で満たされていない状態の子どもたちが多いのかによっても、プログラムの作り方が結構変わってくるんです。なので、そのあたりのヒアリングを地域の方にさせていただきつつ、子どもには事前のアンケートに答えていただく形で、どうい子たちが来るのかということをおあらかじめ踏まえた上でマッチングしていくような作り方をさせていただいています。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

また、そちらで学んだ方々がいわゆる職業につながっているケースはあるんですか。

福本氏 鎌倉のケースでは、まだないんですけども、ROCKETのケースですと、自分がやりたかったことの中で、専門家の方につながって行って、自分で起業をしていくとか、映像作家になっていくとか、そういう道につながっていている子もいます。

地域の方を御紹介させていただく中で、例えば技を学ぶ匠のようなところに入っていくというルートが学校からではなかったりするんです。昔はでっち奉公という考え方があったと思うんですけども、技を学んでいきたくて、そこに行きたいけれども、学校からは紹介がないしというところをつなげていけるということが、1つの多様な仕事につながるルートを開くと思っていまして、最後に御紹介したGOD HANDSなんかは、仕事から学びをつくっていく、それが結果的に仕事に就いていく子どもたちの多様性も生んでいくという流れは生まれてきているかなとは感じています。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

もう一つ、今、鎌倉のお話がありましたが、例えば世田谷区のような都市部、住宅街でこういう取組をするに当たって、何かヒントのようなものをいただけたらと思います。いかがですか。

福本氏 ありがとうございます。都市の場合、変わりやすさというところが都市の特徴の一つでもあるのかなと思ったんです。例えば田舎に行くと、山があって、川がある。なので、年を取って帰ってくると懐かしい景色がそこにあるということが愛着を生んでいく1つのきっかけでもあり、子どもたちの思春期のときのアイデンティティを確立する、変わらない景色が安心感を与えてくれるというところがあると思うんですけども、都会は10年たつと全然違う姿になっています。だからこそ、いろんなものを生み続けているエネルギーであるとか、いろんな刺激を見つける場でもあると思うんです。そこで変わり続けるものの中で変わらないものは何なんだろうと考えていくこと、フィールドワークをしながら、町を知っていくという視点なんかも面白いと思います。

今日、私も久しぶりに歩いてここに来たんですけども、来る途中にもいろんなロゴがあったんです。車屋さんのロゴですとか、そういうものも、ふだん習っている英語とは違う意味を持ってロゴが作られている。それを作っている人たちはクリエイターさんだったりするんだけど、ロゴはどういうふうにならるかということ1つ取っても、実はその意味を考えていく 私たちは言葉を話しますけれども、言葉とか記号を使っていった人間の起源はどういうところから来ているんだろうか、何でそういうシンボ

ルが必要だったんだろうかみたいな探求は、都会の中でこそいろんな視点でできると思います。電車の線路を取ってもですけども、どうしてこういうふうに戻す必要があったんだろうかとか、都会ならではの町の仕組みに探求の視点を入れていって、なおかつ、強化につながっていくような視点をつけていくことも、世田谷だからこそできる学びなんじゃないかなと感じたところです。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

区長、質問でも、今の福本さんのお話を聞いて、世田谷区で取り入れたいものとか、何かヒントを得られたものがあつたらという御質問があるので、それについてお話しいただいてもよろしいですか。

保坂区長 文部科学省が探究的な学びと言っていて、福本さんや澁澤先生のお話にも関連するんですけども、ちょっと考えていたのは、古来、学びはどういうふうに起きてきたのかということを見ると、洞窟に住んでいた人間が平原に出てきて、雨露をしのぎ、時には大風が吹いても倒れない家を建てることもやっぱり学びですよ。それから、湖や海に出ていく。何人が乗れて、沈まない、また、風を受ける帆をどう造るかということも学びであり、失敗すれば命に関わると。そういうことは忘れてりしないんです。そういうふうに見えたことは、多分、大人になってからも 職人さんなんかが一番そういう技術を集積してきた仕事です。

ところが、近代になって、学びというのは学科に分解されて、国語、理科、算数とかで何点なんですかというところで、何点というのが、結果という意味で言うと 入学試験を突破する、入学試験をよりよい点、あるいは偏差値で突破していくと、いい会社に入れるんだという安定期が日本では結構長いこと続いたんです。60年代、70年代、80年代、90年代、2000年代、そして、つい最近、今もまだそれはあります。

しかし、気候危機の問題とかを突きつけられると、もう一度、学びが身体性を取り戻す時期に来ているんじゃないかと。つまり、学んだこと、あるいは、探求していくことと、自分の我が身がどちらに行くのかとか、どういう時代をつくるのか、歩むのかということと非常に密接に結合すると。そういう学びが昔は新しい質 といつか、根源的といつか、もともとの学びだったような気がするんです。そのあたりを澁澤先生にも御意見を伺ってみたいところなんです。また、福本さんにもお願いします。

有馬政策経営部長 澁澤委員、その前に、似たような質問が出ていまして、個性を大事にと言いつつも、受験前になると個性を消すような授業になったりとかしてという御質

問もありますので、それらも踏まえてお答えいただくとありがたいんですが。

澁澤委員 受験の問題は、私じゃなくて、多分、中村先生だと思います。

有馬政策経営部長 では、後ほど。

澁澤委員 中学で受験が見えてきたときの子どもたちの心というのは一番御存じなので。

私のほうは逆に個性の話になりますけれども、こうやってタブレットを見たり、画面を見たり、授業もそうなんです、一方向からだけ情報が入ってきます。しかも、そのほとんどが言語とか数字とか映像で情報が入ってくるんですが、自然の中だとか社会の中というのは、360度、上からも下からも一度に全部情報が入ってきますし、それぞれが思われていることが違うということ。例えば、今日、この会場でもお一人お一人の顔が入ってくるわけです。その中で自分の個性を見つけていくということ。それは、自分が具体的に体を使って、自分の体を動かし、肌感として持ったり、あるいは、そこで急激な違和感を感じたりとか、自分の中で最後はどうやってバランス感覚をつくっていくかということは、体験をして経験していかないと自分のものになっていかない気づきなんだと思います。私は自然環境教育を中心にやってきましたので、自然界というのはその一番いい先生だなと思います。

ただ、日本の自然というのは、あくまでも人間との関わりの中、まさにバランスの中でつくられてきましたので、やっぱり自然の中に人間もいるんです。その中で学びというのは一番大きい。例えば世田谷の子どもでいえば、川場移動教室がとても大きいし、日光の自然学校も大きいのかもしれません。そういう機会をなるべくつくってあげたいなと思います。

一方、現実問題として、文部科学省から必要なカリキュラムの要素がどんどん、ある意味では、スマホにアプリを入れるようになってくるものですから、それもこなさなきゃいけない中で、子どもたちの気づきだとか学びだとか、何よりも自分の心を自立させていく心のベクトルをどう育てていくか、その辺が私たち現場での腕の見せどころというか、一番考えなきゃいけないことだと考えます。

そのときの最大の今の課題は何かといたら、人類の地球との共存なんです。それはSDGsと言われるように、本当に人類がこの地球上で共存できるかどうか分からないところで、今の子どもたちは確実に生きていくわけですから、それを考え、自分が行動する力を使いながら、自分らしさをどう見つけていくか。それがこれから具体的にディテールを

詰めていかなきゃいけない部分かなと思います。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

今のお話の中でも、個性についてかなりお話しされましたが、多分、皆さん、そこら辺は共感されると思うんですけれども、実際、学校でそれができるのかというと、かなり苦しさもあると思うんです。そこら辺を元校長先生だった中村委員から、ちょっと発言しづらいところがあるかと思いますが、教えていただいてもよろしいですか。

中村委員 1つは生き方だと思うんです。最近、澁澤先生の本を読ませていただきまして、本当に澁澤先生はお父様からすばらしいお話を思春期にさせていただいて、今の生き方につながっているということがよく分かったんですけれども、遡って私のことを考えると、ちょっと違ったなと。残念ながら、私及び私の周りの環境もそうでしたけれども、うちの場合でしたら、家業を継ぐのがあなたの使命みたいな言われ方をずっとしてきて、実際、家業は教員ではありませんから、裏切ったことになったんです。それから、私が住んでいた環境には、非常に銀行の寮が多かったです。だから、将来は某有名大学の附属に入って、銀行に就職することが使命みたいに育てられた友人が結構多かったです。

今、教師になってみて、校長になったときの頃を見ると、保護者の方はバブル崩壊でいわゆる就職氷河期の方が結構多く、点数、点数、受験、受験という方がかなり多かったです。だから、学校への成績クレームも非常に多かったですし、我々教師も子どもに生き方をいろんな機会伝える努力はしているんですけれども、家庭と手を携えて、子どもにどういう生き方を伝えていくのか、成績とかテストの点数とかそういうことではなくて、もっと根源的な部分をどうやって伝えていくのかが、学校と保護者の間での共通理解がますます必要なんじゃないかなと思っております。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

確かに個性も大事、でも、成績も大事という、親としては悩むところがあると思うんですが、そこら辺について、保護者の視点ということで、鈴木委員からお話しいただいてもよろしいですか。

鈴木委員 特に私たちぐらいの世代の保護者というのは、偏差値が大切、学歴社会だから、受験制度もあって、点数だったり、偏差値だったり、内申書が大切と考える方がとても多く、新しい学びという話を聞いたからといって、すぐにそちらのほうに方向転換できるかということ、なかなか難しいのではないかと思います。

今、幼稚園や小学生の保護者ですと、まだこれからなので、気持ち的にも余裕があって、

新しい学びについて、探究的な学びとかに対して積極的に関わっていこうとか、学んでいこうとか、そういうふうを考える方が多いと思うのですが、高校受験を目の前にしている保護者としては、自分の子どもの将来を考えるとなかなか難しいのかなと思います。

ただ、先ほど中村委員からもありましたけれども、バブルが崩壊して、保護者のほうも非常に心に余裕がなくなったかなと感じています。私たちが子どもの頃というのは、まだ周りの人たちも非常に教育というか、しつけだったり、そういうことに関わってくれていましたので、そのあたりをもう一度見直して、探究的な学びに積極的に関わっていくことに対し、保護者だけではなく、地域の人たちも巻き込んで、地域コミュニティを大切に、そういうのをまた復活というか、新たなる構築かもしれないですけども、新たなる学びの実践に向けていったらいいのではないかなと考えております。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

鈴木委員は地域と学校をつなげるという取組もされていると思うんですが、そこら辺の実例とかも教えてもらっていいですか。

鈴木委員 私は学校支援コーディネーターをしておりました。お子さんが世田谷の小学校、中学校に行かれています方だと御存じの方もいらっしゃると思うのですが、学校で先生方から教えてもらうだけではなくて、地域の方々のスペシャリスト、その地域の古地図について詳しいとか、野川沿いの辺りに住んでいる方、喜多見とか成城の辺りの方だと、小さい頃から野川の辺りの生き物だったり植物とかに詳しいからという、先生では教えられないような、昔からの蓄積された知恵だったり知識をゲストティーチャーとして教えてくれる人を見つけてきて、学校へつないでコーディネートするという役割があります。ほかの地域ではあまり聞いたことがなかったので、世田谷のそういう取り組みはいいなと思います。

また、私は烏山地区なんですけど、烏山地区だけでは講師が見つからない場合もあって、世田谷区内のほかの学校支援コーディネーターの方に相談して、こういう先生がいるんだよという話を聞くと、そこから御紹介いただいたり、まちづくりセンターに問合せをしたり、いろいろ紹介してもらい、子どもたちに世田谷を好きになってもらう、世田谷はいい町だなと思ってもらう取り組みでありましたのでコーディネートの仕事はとてもよかったと思います。

有馬政策経営部長 学校とつながりたいと思うけれども、恐らく地域の方々では、なかなかつながれないという方もいらっしゃるし、学校も誰かいないのかと思うけれども、な

なかなか探せないというのもあると思うので、すごく難しい役割だと思うんですけども、学校と地域をつなぐ方というのも大切なのかなと今お話を聞いて分かりました。ありがとうございます。

教育長、先ほど、ねいろのお話を御紹介いただきましたが、御質問の中では、90校の中で、こうした取組ができたらいいなという御意見もあり、一方で、そこには難しさもあるのかなという御質問をいただいているんですが、そこら辺についてはいかがでしょうか。

渡部教育長 まず、ねいろが何かということも御質問いただいたということですのでお答えします。ねいろは世田谷区でつくった不登校特例校です。これは学校でしてちゃんと教員が配置されていて、ちゃんとした教育課程にのっとってやっていくということです。ほっとスクールは子どもの居場所機能ですので、教員は配置されていないので、そこに違いがあります。文科省では、不登校特例校をたくさんつくるようにと言っていますが、なかなか増えていかないところです。世田谷区では、ねいろをつくりまして、今たくさん希望者がいて、お待たせしているところもあります。

それではまず、ねいろの取組と、それをどのように90校にという御質問でよろしいでしょうか。

有馬政策経営部長 御質問としては、例えばねいろであれば、先ほど御紹介いただいたように、本人が選択してということができていると思うんですが、90校の学校の中でそういう取組はなかなか難しいだろうなというのが御質問の趣旨だと思うんです。それらを今後どうやって進めていけるのかという素朴な御質問だと思います。

渡部教育長 分かりました。先ほどからもお話がありますが、子どもがこのように変化してきているとしたら、子どもにたくさんの選択肢を与えるというのは、どの学校でもやるべきだと考えています。人数が多いので、人を配置しても難しいというところがあります。ねいろは人数を絞っているので、こういうことができるというところもあります。ただ、学校は、子どもたちが変化しているのにそのまま画一的に授業としてやっていこうとは思っていないはずですが、物理的に難しいところがありますが、少しずつでも探究的に学んでいたり、また、地域の方の力を借りてとか、そういうところに少しずつかじは切っています。

先ほど生き方指導ということがあって、成績のこともあったので、そこにも触れておきたいので、いいでしょうか。

前は、いい大学に入れば、よい将来が約束されていた。よい大学に行って、よい就職を

してという考え方が一般的にあったと思うんです。でも、今は企業も30年ぐらいしかもたないと言われていています。これからは企業に入ることではなくて、自分がどう生きていくということが重要だという形になっていって、世田谷区では、キャリア・未来デザイン教育、キャリア教育を取り入れています。よい大学に入ることではなくて、自分はどのように生きていきたいのか、それには何が必要なのか。そうしたら、大学で資格を取ることだったり、大学で法律を学ぶことだったりするということです。それを子どもたちに知らせていかなければいけないということです。

大学に入った途端に、それで自分の将来は約束されていると思っている子どももまだいると思います。そのときに家庭では、あなたは将来的に何をやりたいのということを活かしていただければいいのかと思います。

1つ例を挙げると、ハローキャリアワークを世田谷区では始めています。企業の方と一緒にやっているんですが、例えば、ここに空き地がある、この空き地を有効に活用するにはどうしたらいいですか、それを子どもの視点から教えてくださいと本気で言っているんです。この空き地は、土地柄から見て、きっとニーズはこれだろうみたいなことを子どもがお話ししているんです。それから、違う会社ですが、売れる商品のキャッチコピーを作ってほしい、それは子どもの視点から言ってほしいと言われてたといって、子どもがたくさん視点を出したというんです。それは、そのまま使えないかもしれないけれども、会社の中で必ず生かしますという約束をしてくれています。こういう取組をやっていくと、自分はキャッチコピーを作るような会社に行きたいとか、自分はこういう土地の活用をする会社に勤めたいとか、少し視点が広がっていくと思っています。学校の中だけでは、こういう視点を言葉で言っても、子どもにはなかなか伝わらないです。だから、地域の方たちと共にやっていきたいというのが大きな願いです。

ぜひこの考え方を地域の方と共に共有していきながら、先ほどのコーディネーターのような役割の方とつながりながらつくっていききたいというのが、大きな学校の転換期における願いです。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

時間も後半になってきたので、質問がだんだん難しくなっているんですけども、実は教育長にもう1個質問がありまして、これは難しい御質問で申し訳ないんですが、1つのクラスに勉強ができる子と、ちょっと苦手だなという子がいる中で、今、個別最適化みたいなことが求められているわけですけども、これをどうやって進めていくのでしょ

うかと会場から御質問があるので、それについてもお答えいただいでよろしいですか。

渡部教育長 得意なものと苦手なものは子どもたちの中でもはっきりしていますし、算数が得意な子はもっと先を学びたいと思っているし、苦手な子はもっと基本的なことを学びたいと思っています。これを個別最適化、一人一人に応じてやっていくというのは、現場では難しいことです。ただ、学校では、少人数で分けて、1人、加配の先生を入れて、3つのところを4つに分けるとか、細かいところでは、そういうことをやっています。

でも、一番進んだのは、ICTの活用です。タブレットを使うということは抵抗感があるかもしれないんですが、いい問題が出てきたりとか、上を行っている子どもたちが短時間でたくさん問題を解くことができるとか、このような形でできたりもします。タブレットというのは、私たちにとって最初はこれはどうかと思うところもあったと思いますが、タブレットを使うとこのような使い方もできます。分からない子どもがドリル的なものを学んで、自分に苦手な問題を出してもらって、それを何回も解くとか、英語の音がなかなか聞けない子どもが、何回もその音を繰り返し聞きながら、スペルを学んでいくとか、聞き取りの問題をやっていくとか、一概に全てをタブレットでやるのではなくて、その子に応じたことをやっていけるというところでは、いいツールに 世田谷区では、これを文房具と呼んでいます、いい文房具になってくれていると思っています。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

会場からも、今後、ICTとかを使っていくことがいいという意見もあれば、ちょっと不安だという意見もあるんです。今お話を聞きながら、藤井聡太君なんかは、まさにAIで将棋をやっていて、あれだけの力をつけているということで、使い方によってはすごくいい面もあるのかなと思うんです。

そこで福本さんに御質問なんです、会場からも出ていて、福本様の場合は、今はどちらかというと学校の外で活動されている部分があると思うんですが、これまでのお話も受けて、また、今、ICTというお話もありましたが、学校の中で実行するためには、こんなことができるんじゃないかというのをちょっとお話しただいでよろしいですか。

福本氏 ありがとうございます。今日、御紹介させていただいたアセスメントなんですけれども、学校の中でも実は入れていただいているところがあるんです。例えば1クラス最大40人の子どもたちの様子を、先生もすごく毎日気にかけているんですけども、そんな状況だったのというところまで分からない。本当に好きなことが何なのかということも分

からないまま中学に入ったら、特に受験の方向で進路指導してしまうところに先生方が結構悩まれているという現場の声も聞いていたので、子どもがどんなことに興味を持っているのか、今まさに興味を持っているものも含めて、テキストマイニングするということも含めて、子どもたちに自己理解としての材料を提供すると同時に、先生たちが子どもたちを深く知るというのがICTによってかなっているんです。クラスの中に入れてみると、自分はこういう傾向があるかもしれないという子どもたちもいて、それが子ども一人一人の理解だけじゃなくて、あなたはこういうことが得意だったかもしれないという、他者理解にもつながっていくということも起こり始めて、結果的にクラスの雰囲気物が物すごく心理的安全性 要は、自己開示しやすくなるような雰囲気が起こったという声は実はあります。

私も決してICTが全ていいとは思っているわけではないんですけども、副次的に自分理解ということが他者理解につながり、他者からの目線で見たときのあなたのいいところ、あなたが得意だと思うところはこういうことだよねというのがやりやすくなるようなものが さっきのちょっとしたツールによって促進するということが起こるんだなと感じました。

逆に澁澤先生がさっきおっしゃっていたように、ICTで情報化されることによって見える化する、そして、知識の習得なんかも個別最適になっていくというところがあっても、頭で分かったことと、体で知っていることは全然違うことだと思うんです。ROCKETのときや、今のかまくらULTLAでも、身体性というところにすごく時間をかけてやっているんですけども、要は、私たちは命がある人間である、命を持った生命体として、この町でどういうふうに豊かに、どんな暮らしをしていきたいのという問いがあってこそ、初めてICTの使い方も、どういう使い方があるんだろうかということもありますし、逆に身体性を伴う学び場をつくる、生の活動を通して学んでいくことのすばらしさは時間がかかることだと思うんです。ネットで調べるのは物すごく簡単に、すぐさま、この範囲内でいろんな知識、情報を得ることはできるんですけども、時間をかけないと変化をしていくことがないというものたちにあふれているのが自然活動のメリットでもありますし、そこには有限性があるということも教えてくれるのも自然のエッセンスだと思うので、その両方がある 命として、私たちは何を選択していくのかということが根本的に教育の中核に置かれることが、結局は子どもたちの命の尊厳であったり、子どもたちの個性を尊重する教育をつくっていく大事なポイントになってくるのかなと感じています。

有馬政策経営部長 今お話を聞いていくと、公立小中学校でも活用の可能性があるのかなと伺っていました。ありがとうございます。

そろそろ時間が迫ってきたので、最後は区長にまとめていただくわけですが、その前に教育委員さんから一言ずついただいてもよろしいですか。短い時間で申し訳ないんですが、澁澤委員から先に。

澁澤委員 福本さん、今日は本当にありがとうございました。私も何回も総合教育会議に出ていますが、いろんな視点でとても考えさせられる会でしたし、いい形で進めていきたいなと思っております。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

では続いて、中村委員、お願いしてよろしいですか。

中村委員 先ほど生き方と申しましたけれども、やはり哲学だと思います。お二人はすばらしい哲学をお持ちで、私も今日勉強させていただきましたけれども、私のように受験、受験でやってきた人間はちょっと哲学が欠けているなといたく反省しております。ありがとうございました。

有馬政策経営部長 ありがとうございました。

鈴木委員、お願いいたします。

鈴木委員 福本先生、今日はありがとうございました。本当にこれから私たち保護者もどんどん変わっていかなくてはいけないんだなと。昭和から平成、そして今、令和になって、令和生まれの子どもも2年後には小学生になるという時代になっていますので、大人たちも新しく学び、変化を恐れず、これからも進んでいきたいなと感じました。ありがとうございます。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

教育委員さんにおかれましては、また後ほど御議論いただきますので、そこでまたいろいろお話しいただければと思います。

教育長、お願いいたします。

渡部教育長 最後に2つだけ簡単にお話をさせていただきたいんですが、先ほどICTのよさということをお話ししたんですが、私はやっぱりよさだけではなくて、考えるところはたくさんあります。一方的な情報だけをずっと得ているのでは、多くのことは得られないと思っています。その場に行って、風のにおいだとか、天気だとか、人との距離感だとか、そういうことでしか、いろんな感覚や自分というのはつくっていくことができない

ので、子どもたちについては、タブレットだけではなくて、そういうことも大事にしていきたいと思ったことが1つ。

それからもう一つは、個才を生かす教育には全く同感なんですが、子どもたちが何を望んでいるかということが大変分かりにくいということです。子どもたち自身も分かっていないことが多いです。自分は何をやりたいのか、何をどういうふうにしていきたいのかということは、子どもにとっては難しいです。今までは与えられたものをそのまま受け入れていた教育の中では、難しいです。だから、御家庭でも様々なところでも、自分は何をやりたいのか、何を感しているのか、何が嫌なのか、何をどうしたいのかということ、ぜひ自分で感じたり、何か表現できたりする子どもに育ってほしい、同じ視点をもって伝えてほしいと思います。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

第1部はそろそろ時間になりますので、最後に区長からまとめをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

保坂区長 たくさんの方が議論になったわけなんですけれども、1つは、私の発言の中でも、かなり長いこと、いわゆる戦後、1960年代から最近に至るまで、比較的社会が安定していて、その中で、テストや偏差値での学校信仰、学力信仰というか、学歴信仰みたいなものが多くの家庭の中で相当のウエートを持っていた、今もそれは残っているという話をしました。

一方で、最近、この5年ぐらいの傾向で感じるのは、世田谷区の保護者たちの中で、ただこれまで繰り返されてきた教育の繰り返しの中だけでは、やっぱり子どもたちはもっと豊かに また、全く先の見えない時代に、また、学歴競争みたいなものの出口のところ、企業も国際競争力が相当低下して、かなり激変しています。

そういう意味で言うと、日本の教育そのものの中に、本当に平準化されて、どこの学校に行っても同じように学べて、機会は平等でという神話があったんですけども、そこに大きな亀裂が入ってきているというか どういうふうに変えればいいのかというところについて、福本さんのお話の中では、ROCKETの話が分かりやすくありました。

1つ、世田谷区でも直面しているのは、不登校でこれだけ多くの子が学校に行けない。今、ねいろの話があり、ねいろは随分柔軟な、子どもにとってどうかなということをちゃんと問いかけながら、学習プログラムなども選択していけるような仕組みを取ると。そういう学びであれば、非常に子どもたちは育っていくということもありつつ、それだと希望

者がすごく多くなって、どんどんつくれないというジレンマもあります。

ただ、行政としては、教育機会確保法という法律がありますので、今までは学校だけが教育の場であり、学校に来ないということは教育を受けないのねという形だったのが、フリースクールも含めて、あるいは、学校外にも子どもの学び場はあり得るんだと。つまり、子どもはいろんな形で多様に学ぶ権利を持っている、その主体なんだということが書かれています。ということは、様々な特性のある子どもたちにとって、徹底して集中して何かを突破していくような経験を持った学びというのは本当に必要なんだろうなと。教育自体の今までの概念を一皮も二皮も破っていくような取組、新しい学びの場というのは必要性があると思います。

ただ、それと同時に、そういうものをもし仮に構築したとするならば、そこに向けて、たくさんの希望者が出てくるかもしれない。世田谷区全体の学校はどうなんだろうという問題をやっぱり解決しなければいけないんだと思うんです。

学校教育全体を変えていくに当たって、今、ただでさえいろんなプログラムが入っています。英語やGIGAスクールのタブレットも入ったし、教員の多忙化は解消できていない。その結果、年次を追うごとにだんだん希望者が少なくなって、競争率が落ちてくるみたいなことも懸念材料としてはあります。なので、学校全体を変えるためには、こうやってうまくいったという事例や実証例というのはやっぱりないといけないんだろうなと思いました。

澁澤先生とのやり取りの中で、学びが身体性を取り戻すという。これは教育総合会議でも度々そういう言い方で確認をしてきた話なんですけど、1つ、世田谷区の喜多見児童館というところで、多摩川をウォーキングでずっと歩いていったときに、ある子どもが大田区のところで羽田の渡しの表示を見つけて、渡して何だといって、渡し船であるということが分かって、宇奈根というところにも渡し船があったんだという話を児童館の子どもたちが調べて、子ども夢プロジェクトというのがあるんですが、復活させてみよう。本当にそれは面白いアイデアでした。

これがいろんな意味で奇跡が起きて、宇奈根の渡しは、そのとき、廃止されて60年だったんですが、60年以上前にお父さんが船頭で、そこを手伝っていた少年が、今、おじいさんになっていらっしまったんです。その方がとても器用な方で、図面とかを作らずに船を造っちゃうんです。喜多見児童館の子どもたち製作の船ができました。それに区長を乗せたい、あるいは、だんだん話が大きくなってきて、川崎市長も迎えに行こうとか。結果、

地域の大人たちが300人、400人出てきましたでしょうか、川崎市長も来て、大きな盛り上がりがありました。今も継続しているんです。

これは、多分、身体を取り戻した学びであり、子どもたちも何回もいろいろ相談したり、せっかく準備しても、雨で川が増水して出せなかったりとか、いろんなドラマがあるんですけれども、学校の外で起きている、既に世田谷区にある子どもたちの学び、育ちの場というのもしっかり着目していきたいと思います。

イエナプラン教育というのを前の教育長の時代に、中村委員も一緒に見に行ったことがあります。学年もやっている勉強も全部ばらばらで、どこで子どもたちは目標を持つのかなということで、僕がすごく印象的だったのは、1人の女の子が、当時、コンピュータールームでネルソン・マンデラのことを調べていたんです。マンデラの写真があったので、聞いてみたら、自分が発表するんだと言っていました。

学期に1回ぐらいですか、学んだ内容を地域の人たちにプレゼンテーションする時間というのがあって、子どもが演壇に立って、みんな自分が学んだことを地域の人たちにお話をする。問題提起をしたり、自分の意見を言うときに、大きな拍手が来たり、よかったよというリアクションがあったりすることがとてもいいんだという話を聞き、これも学びが身体性を取り戻すというか、現実と学んだということがどこかでまた近づいてくるということじゃないのかなと思います。

そういう意味で言うと、決して特別なことではなく、今ある資源をうまく使いながら、学校がよりよく変わっていけるような実践を、これから後半にやる教育大綱の議論に結びつけていきたいと思いました。

以上です。

有馬政策経営部長 ありがとうございます。

教育委員の皆様もありがとうございました。福本様もありがとうございました。

会場の方、Zoomで御質問の方もありがとうございます。ただ、全ての御質問にお答えできずに大変申し訳ございませんでした。

時間になりましたので、これにて第1部のプログラムは終了いたします。

この後、休憩を挟みまして、第2部を行います。

なお、基調講演、また、意見交換にて大変貴重な御意見をいただきました福本様におかれましては、これをもって退席となります。福本様、本日は誠にありがとうございました。

(拍手)

それでは、中途半端ではございますが、15時7分から始めさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

(休憩)

司会 それでは、時間になりましたので、再開をさせていただきます。

第2部は「教育大綱策定について」でございます。

教育大綱の策定に向け、傍聴いただいている皆様から、教育大綱に盛り込むべき視点や考え方についての御提案を募集しております。オンラインで御覧いただいている方につきましては、ZoomのQ&A機能にてお寄せください。会場にお越しの方は、受付の際にお渡ししております様式に御記入の上、お帰りの際に入り口の回収箱にお入れください。

それでは、議論に先立ちまして、まずは資料について説明させていただきます。

まずは教育大綱でございます。こちらは先ほど区長からお話しいただきましたので、私のほうからは、下線部 世田谷区教育大綱は、世田谷の教育の大きな方向性、基本的な枠組みについて定めるものとしております。

こちらの位置づけでございますが、左上に世田谷区基本構想、世田谷区基本計画という区全体の計画がございまして、こちらと、教育委員会が策定する右側、教育振興基本計画の整合連携を図ります。これから議論するのは世田谷区教育大綱ということで、教育の方向性について区長部局で定めてまいりますが、こちらは教育委員会で定める教育振興基本計画と方向性を一致させるという関係性になっております。

続きまして、世田谷区基本計画審議会答申の抜粋でございます。こちらは、教育だけではなくて、世田谷区全体の計画についての答申をいただいております。特に教育に関わりのある重点政策3つを抜粋しております。

子ども・若者が笑顔で過ごせる環境の整備ということで、キーワードのみ拾っていきませんが、まず1つ目が、子ども・若者は一人一人が権利の主体である、子ども・若者の声をしっかり政策に聞き入れるということです。2つ目が、全ての子どもが自らの選択により、地域で豊かな体験を重ねる、力を発揮できる場、安心して過ごせる場の環境づくりが必要。3つ目が、非認知能力について、乳幼児期の教育や保育の質の向上について書かれています。4つ目、5つ目は、すみませんが、後ほど御覧いただければと思います。

新たな学校教育と生涯を通じた学びの充実です。こちらは先ほど区長からもちょっとお話がありましたが、まず1つ目は、画一的な学び方から個に応じた多様な学び方へ、多様な個性、能力を伸ばし、子どもたちが生き生きと学べる新たな学校教育を目指すという

ことが記載されています。2つ目は、増加する不登校の子どもへの支援やインクルーシブ教育の実現について、3つ目は、地域の多様な社会資源と連携協働について、4つ目は、誰もが生涯を通じて何度でも学び直しができることについて記載されています。

多様な人が出会い、支え合い、活動できるコミュニティの醸成です。1つ目は、全ての人に居場所と役割があるまちづくりということで、教育にかかわらず、世田谷区民全員にというところでございます。地域コミュニティーを図っていくわけですが、ここには教育も当然関わってくるということになります。また、多様性の認め合いとか、様々なことが書かれておりますが、こちらは後ほど御覧いただければと思います。

続きまして、これまでの総合教育会議の経過でございます。区長からも説明がございましたので、端的に説明させていただきます。

まず、平成27年から学びの質の改革を主軸としまして、議論を重ねてまいりました。具体的には、学びの多様性、幼児期の遊びと学び、配慮を要するお子さんへの支援、自己肯定感、SDGs、ICT、教員の多忙化、不登校の子どもたちへの学びなどをテーマにしてまいりました。

下の丸ですが、先ほどもちょっと話しましたが、幼児教育における自己肯定基盤としての非認知能力について、学校外の子どもの居場所、また、多世代との関わり、3点目が、体験、経験の豊かさ、4点目が、未来への予測が困難な時代における正解がない問題へのアプローチ、また、他者と意思疎通して解決の道を開くなど、学びの質の改革の必要性について、5点目が、1人1台のタブレット端末が整った中での個別最適化された学びについて、次が、SNSの普及、生成型AIの技術革新に伴うものや、ネットリテラシーに関すること、また、考えたことを理論的に構築し、人に伝えていく機会にもつなげていくこと、次が、不登校で悩んでいる子どもの増加について、次が、新たな施設整備、ICTを活用した支援など、さらなる不登校対策の必要性について、次が、通いたくなる学校への転換、下から2つ目が、教員の多忙化、その一方で地域や学校外の人たちが学校運営することの重要性、最後が、不登校支援やインクルーシブ教育など、公立学校の中における新しい学びの場の創出について記載がされています。

最後に、教育大綱の視点でございます。こちらは教育全体を捉えているものではなくて、これまでの総合教育会議で議論したことや、区の基本計画の答申を踏まえまして、重要なポイントを掲げていると思っていただければと思います。こうした視点を持ってこれから御議論していただくこととなります。まず1つ目ですが、子ども自身の意見の表明、参画

に関すること、次が自己肯定感の尊重であったり、挑戦できる教育を目指すこと、3つ目のセンテンスが、知恵や力を合わせていく機会の創出について記載がございます。2つ目の丸は、例えば世界の課題や地球環境問題に向き合うなど、子どもと大人が語り合うことであったり、共に学ぶことについて、2センテンス目が、地域課題の解決策や関心が高いテーマについて掘り下げ、探求的に学ぶこと、また、個性、能力を伸ばす学校教育の転換について記載しております。最後ですが、こうした予測困難な時代にあって、子どもから大人まで学ぶ者が行動することのできる社会性を獲得するためにはということで、区及び教育委員会との連携、また、地域や関係する団体と連携協働した新たな価値を見いだす教育を目指すということが記載されております。

簡単ではございますが、私から資料の説明は以上となります。

では、ここから区長と教育委員会による議論となりますので、進行は区長にお願いいたします。よろしくお願いたします。

保坂区長 それでは、早速、教育大綱の議論をしていきたいと思ます。

冒頭、ちょっとお話ししましたけれども、総合教育会議の法律上の重要な役割というのが教育大綱を定めるということになっています。

実は1回目の総合教育会議が開かれたときに、当時の教育委員会の教育ビジョンというのができていましたので、それを丸ごとゼロから組み立てるのは大変なので、時間もないしということで、そこでスタートしました。それ以来、7年、8年、今説明をしたような議論を続けていますので、今回、実は教育大綱を議論の中からつくるという初めての挑戦になります。つまり、総合教育会議、区民に公開した場でこうやって議論してきたことをもう1回集約し、煮詰め、また、現状の課題に照らし合わせながら、しかも、どちらかという教育の大きなあらあらの方向性について、こういうことはいこうというのが大綱ですから、そこに何を盛り込んでいくのかを議論していきたいと思ます。

教育大綱の視点ということで、第1番目にあるのは、子どもの権利条約の事実上の国内法として、こども基本法というのができ、世田谷区も子ども条例を持っていて、子どもの運命、子どもの環境、子どもに関わることは、子ども自身が成長、発達において意見を言う権利があるということを確認に ようやく日本でもそこが前提となって、これから子ども政策を考えていこうということになったので、そこに関連したことはやはり何らかの形で入れたいと思っております。

それから、学び方、学びの質の転換の話は第1部でしましたけれども、それをチームで

シェアし、友達と共有し、助け合い、そして、難題に対して力を合わせる、こういうような力というのが今後必要になるのかなというのが、この視点の中に書かれています。

もう一つは、SDGsと書いていますけれども、今日も線状降水帯が西日本のほうで相当大雨を降らして、被害が広がっているということが報道されています。こういった、過去まるでなかった極めて激しい豪雨　カナダの火事がニューヨークを全くスモーク状態にしちゃったと。3日前にフランス在住の方とシンポジウムで話したら、今、ヨーロッパにその煙が来ているそうです。というようなことについて、今後の学校教育や学び、あるいは、学校外での子どもの育ちと、現にある気候危機をはじめとした格差、貧困の問題とか様々なことの現実に向き合うという部分も必要なかなとこの視点で書いております。

第1部の議論もありましたけれども、不登校の子どもたちから、学校に通い続けながら悩んでいる子たちまで、教員の現状まで、全部包括しながら、90校、たくさん子どもたちと大人たちの中での合意形成をしながら、教育の改善を図る、こんなことを盛り込めたらいいなと思っております。

では、一人一人、こんなキーワードが入るといいなということで、会場の皆さんにも後々書いてもらいますけれども、澁澤先生から順番にお願いできたらと思います。

澁澤委員　教育大綱というのはどういうものかという細かい規定は、実は国の中でもなくて、ここに書いてあるとおりの文章しかないんです。一体どういうものかということを考えてときに、これは私の個人的な見解ですけれども、憲法の序文に当たるものだと思うんです。具体的に細かい記述はないにしても、何かあったときに考え方の基礎に戻るところ、要するに、自分たちが悩んだときに、もう1回、教育とはそもそも何なんだ、私たちは何をやらなきゃいけないんだということに戻れる場所というようなものかなと私は思っています。

これからの時代　先ほど言った、視点を子どもに戻して、多様性を認めるという議論をずっと今までしてきましたけれども、これを私自身に置き換えてみると、私が本当に人生の中でやらなきゃいけない自分の生き方はこれだなと気づいたのは、申し訳ないんですけれども、50歳を過ぎてからなんです。小学生のときに自分のやりたいことを見つけなさい、中学生のときに自分の進路を決めなさいというのはしんどいと思います。ですから、少なくともいろいろなチャンスがあるんだよ、何をトライしてもいいんだよ、その中で、何となく自分が心を誘発されて、心に火がつくのはこんな方向かなということを見つけれ

れる状態を学校教育がどうつくってあげられるかというレベルでしてほしいなと思うし、逆に自分の生き方を中学までに見つけなさいと言われても、とても困るなと思います。それが大前提です。

それから、この文章の中で、多様性という言葉がたくさん出てきます。今、社会の中でも、それこそ性の多様性とか生き方の多様性とか、多様な何々というふうに、多様という言葉がつくことが物すごく多いんです。

私たちも多様性というのは重要だと思っていました。例えば地球温暖化ということが騒がれ出したのは、実は1992年のリオデジャネイロの地球サミットからなんです。そこで持続可能性、サステナビリティという言葉が初めて出てきます。その中で、2つの視点からものを見ていこう、1つは生物多様性の視点、もう一つは地球温暖化と言われている気候変動の2つの視点でこれからの環境問題を考えていこうと合意されました。

その出された気候変動は、例えば温暖化はしないようにしたいよね、つまり、正解値が見つかるんです。ところが、生物学者の中でも、何で生物多様性が重要なんですかと問われたときに、それはそもそもこういうことなんだということをはっきり言える人は誰もいなかったんです。要するに、それは地球が多様だからという答えでしかなかったです。

この多様性というのは、私たちがやっている生物学から考えると、例えば私たちの体は大体37兆個ぐらいの細胞でできているんですが、その細胞というのは大体2か月から3か月ぐらいでほとんど新しいものと入れ替わっていきます。何と入れ替わるかということ、私たちの食べたものと入れ替わっていくんです。つまり、私たちの体の中では、絶えず細胞が死にながら、また新しい細胞が分裂によって生まれていくという形で、私たちは命をずっとつないでいきます。なおかつ、それを支配するのは、DNAという遺伝子のプログラムなんです。

ところが、私たちの体の中には、37兆個の細胞よりはるかに多い40兆個ぐらいの細菌が、皆さんお一人お一人の体の中に現実的に今生きています。その細菌のおかげで私たちは消化をすることができるし、免疫機能を健全に保つことができるし、自律神経を健全に保つことができるということです。これは何も細菌だけじゃなくて、ウイルスだとか、古細菌だとかという、もっと原始的なものを考えると、人間の遺伝子よりはるかに多い数の遺伝子が私たちの体の中をつかさどっています。それが絶えず生まれ変わっています。

つまり、一体自分とは何ぞやということなんです。自分というものは実はなくて、それは絶えず動いているもの、社会とつながっているものです。私たちは皮膚がありますから、

そこで境だと思っていますけれども、顕微鏡で見れば、皮膚なんていうのはすかすかで、幾らでも出たり入ったりということが自由な状態で、そんな中で、私たちはそれぞれが宇宙の銀河として浮いているぐらいの個別の塊として、まさにそれが身体性として生きている。ということは、生物的には、ここの空間は実は全部つながっているということなんです。

ここでは、皆さんお一人お一人、個性と思われるかもしれませんが、実は生物学的に見たら、この空間というのはほとんどつながっている状態で、全部の命がつながっているからこそ、1人の命が欠けても、そのバランスは全部壊れるということなんです。地球の裏側で1匹の虫が死んでも、あるいは、今のウクライナの戦争で1人の方が亡くなっても、今、こちら側にいる私たちの命も全部つながっているということなんです。ですから、地球の命のバランスを取るためには多様性が必要なんですよという議論が生物学的な議論です。

けれども、ある意味では、これはやはり物の考え方においても、本質として捉えるべきだと思います。要するに、相手の人は異様だけれども、自分とは違うけれども、認めるではないんです。自分と一緒にだから、違うものを認めると。それを導き、築いていけるようなことがやっぱり教育の根幹にあるべきなのかなと思っています。

それを制度に落としていくのは、まさにここに書いてある基本構想ですとか計画だとかというのは、教育委員会の事務方、あるいは先生方が入って、そこで具体的につくっていきませんが、憲法の趣旨にあるものはみんながつながっているんだよ、みんなで一緒に生きていこうという精神なのかなと私は思っております。

保坂区長 大綱をつくる上で大変ハードルが上がったかなと。相手とは違うから、お互い認めましょうねと私も含めて言っているんですが、命全体として、人も他の生物も地球自体も捉えていこうと。ということは、個々の命は有限、いつか寿命を迎えて亡くなるわけですけれども、私たちは祖先が様々やってきたことの記憶の中で生きている、そして、教育大綱に記そうということも、50年後、100年後にも検証にたえるようなものをつくっていこうと。つくるのは大変ではありますが、必要な問題提起、ありがとうございました。

それでは、鈴木委員、お願いします。

鈴木委員 非常に壮大なお話の後だったので、なかなか難しいかなと思うのですが、保護者としては、子どもをこの世田谷で育てたい、安心して任せられる教育があるという安

心感と信頼感の2点があることを明確に打ち出している内容が重要なのかなと考えています。それから、未来の世田谷に生きる子どもの姿をどのように描くのかも必要かと。どんな資質を求められて、どんな資質が必要なのか、そのあたりを考えて、文章化というか、表現していただければいいと思います。

それから、せっかくですので、世田谷の強みみたいなのがあればいいのかなと。恐らく東京23区の中でも世田谷は、自然だったり、教育だったり、いろいろな面で、ほかの区にはない強みがあると思いますので、そのあたりも検証しながら、大綱を作成していくといいのではないかと考えております。

保坂区長 ありがとうございます。確かに世田谷区で子育てをしていこうという中で、教育に対する信頼とか、教育を支える地域がどうなっているかということもすごく大事だと思いますし、子どもというところにフォーカスすると、この教育大綱では、子どもたちはどう考えるのか。これも先ほど子ども基本法なり、子ども条例を紹介しましたけれども、ぜひ聞いていながら、つくりたいと思います。

それでは、中村委員、いかがでしょうか。

中村委員 今、鈴木委員のほうから、安心感とか信頼感というお話がありました。私が現場にいるときから非常に課題と捉えていたことの 하나가、具体的に言うと、2月1日、2日の小学校6年生の教室がすかすかになってしまうことです。皆さん、御存じですか。世田谷区は30%以上の児童が私立中学に進学します。これはパーセントだけを見れば、都内ではそんなに高くはないですが、子どもの数掛ける30%にして、実際の進学者数にしたら、多分、東京23区というか、東京都全体の中では、1位、2位を争う区なんじゃないかなということなんです。

つまり、世田谷区の教育施策とか、世田谷区の学校教育より、私学教育のほうに関心の高い方々が一定数いるということ、しかも、全員が合格しているわけじゃないですから、例えば掛ける1.5倍とすると、5割の方が受験している可能性もあるわけです。ということは、今言ったように、5割の方が私学教育のほうに関心が高いという現実の中で、我々は教育大綱をつくらなければならないという、東京の大都市ならではの宿命があるということです。なので、非常に理想は高いですけども、そういったことも含めて、一人でも多くの方に共感していただけるような教育大綱をつくる必要があると私は思っております。

今、国の振興計画の中でもよくウェルビーイングと言われますけれども、子どもの幸福ということを第一に考えれば、どなたでも共感していただけるのかなと思いますし、それ

から、多様性のこともありますが、そういったことを踏まえて教育大綱を考えていければいいなと思っております。

以上です。

保坂区長 中村委員、坂倉委員のビデオレポートの中に、神山町の5000人というサイズで、PTAの30年前の男性たちが中心になって、いろいろやっていこうよ、やっちゃおうという話を世田谷に当てはめた場合には、あまりにも世田谷区は大き過ぎるよねというところで、学び舎単位でみたいなお話がありました。これも世田谷区で20年近く前ですか、地域運営学校、そして、学び舎というスタイルをつくっていますが、その点と教育大綱、地域と学校みたいなところは御意見いかがでしょうか。

中村委員 区長がおっしゃったように、世田谷区全体となると、なかなかフットワークという点で難しいところがあるかもしれませんが、中学校区を1つの単位として考えると、いろんな教育活動の可能性が高くなってまいります。

私は以前、違う仕事をしていて、介護保険の世界で、住民の助け合い活動の団体を増やすというのが目標であったんですが、やはり基本の単位としては中学校単位と言われていきます。いろんな物事をするのに中学校単位というのが、世田谷区でいえば、既に学び舎という基本単位が出来上がっています。ただ、残念ながら、学び舎によって多少の温度差は現状ありますし、単なる学校間の連携活動にとどまっています。もっと視野を広げて、いろんな教育活動、例えば教育長が以前やられた、おやまちプロジェクトのようなものが1つの大きなサンプルになると思いますので、そういった形で、今後、学び舎の活動を活性化していくということも1つの視点としてあると考えております。

保坂区長 ありがとうございます。

それでは、教育長からは、映像のほうも提供したいと聞いております。お願いします。

渡部教育長 私からは、少し視点を変えてお話をさせていただきたいと思います。

皆さんにお配りしている世田谷区基本計画審議会の答申でも、子ども・若者が笑顔で過ごせる環境の整備の中の一番最初のところに「子ども・若者の声をしっかりと聞き政策に取り入れる」と書いてあります。それから、教育大綱の視点の中にも、一番上のところに「子ども自身が意見を述べて、参画することが出来る基盤を整えます」と書いてあります。このように、こども基本法が今年の4月に施行になって、これからの教育では、子どもの声を聞くということが重要になってきます。

そこで、6月に生徒会サミットというのを行いました。生徒会サミットは、中学校の29

校の代表の生徒が集まって、各学校での取組を共有するとともに、世田谷区全体の取組を高めていくということを狙いにしています。

この生徒会サミットで、ユニセフの方に来ていただいて、子どもの権利条約について話を伺って、自分たちの生活と子どもの権利条約がどのように結びついているかということ学びました。子どもたちは新たな気づきを持って、自分たちのことだけでなく、世田谷区内の中学校全体のことを知りたいと思いました。

そこで、この考えを全校に広げるために、生徒自身が出演してビデオを撮りました。そのビデオを、5分間なんですけれども、短くして2分間でお見せしたいと思いますので、お願いします。

(ビデオ上映)

渡部教育長 ありがとうございます。

このビデオの中にもありましたが、生徒は学校によって違いがあるということに気づいて、全校の生徒の考えを知りたいといって撮ったものです。子どもたち自身が自分たちの学校のことを知るといって試みは、既にこのように始めています。

また、校長会でも今年度の基本方針というのを私がお話することになっているんですが、4つの方針の中の一つに子どもの声を聞くということを挙げています。子どもの声を聞くのには、子どもの声を聞いて、学校のどこかに生かしていくというのと、先生方がよくお話しなさっているのは、子どもに寄り添って、子どもの心の声や願いを聞くというふうに、2つのことがあると校長先生と話をしていて気づきました。学校によっては、生徒会の意見をこんなふうに生かしていますという学校もあれば、子どもの考えを知るところがないので、2番のほうから先にやるという校長先生方もいました。2番から始めている学校のほうが多いと思っていますが、子どもの声を聞くという取組は少しずつ前進していると思っています。

このように、様々なときに子どもの意見を聞くということが、これから先はとても重要になっていくので、大綱の中にもこのような考え方を示していければいいのかなと思っています。

以上です。

保坂区長 ありがとうございました。

残りの時間が少なくなってきましたけれども、子どもたちも子育てをめぐる親子でも、あるいは、地域と子どもたちの関係でも幸せである、ウェルビーイングですか、お互いの

よいところをちゃんと見て、酌み取りながら穏やかに、なおかつ、それなりに社会的にも必要な方向に子どもたちが育っていく、そんな基盤が世田谷区であればいいと思います。

最後に、教育大綱にこれはどうしても入れていこうという言葉、キーワードを少し短めに言っていたら、まとめていこうと思いますが、今度、順番を変えましょうか。中村委員からお願いします。

中村委員 先ほどから出ているように、多様性もありますし、今出たようなウェルビーイングということもあると思いますが、その辺をぜひ盛り込んでいただければと思います。よろしく願いいたします。

保坂区長 多様性とウェルビーイング。

ウェルビーイングという言葉は、教育長、最近、いろんなところで使われているんですが、もうちょっと中身をしっかりしたものにしなごら、伝えていかなければいけないとも思いますけれども、そのあたりはいかがですか。

渡部教育長 このウェルビーイングの考え方というのは、皆さんも御存じかと思っておりますが、国の教育振興基本計画の中に大きくうたわれています。今まではウェルビーイングというところに重きを置いてこなかったんですが、子どもが自分の幸せとともに、ほかの人たち、周りの人たちの幸せも考える、日本型のウェルビーイングが必要になります。ただ単に自分が幸せなハピネスとは違っていて、自分とほかの人との協働の関係の中で成り立っていく、それが日本型のウェルビーイングと言われています。教育の中では、自分だけのハピネスを追求するのではなくて、ウェルビーイングとして、自分もほかの人と一緒に幸せになっていくという考え方を取り入れていきたいと考えています。

保坂区長 これは、いつだか、オランダの教育とかの話聞いたときに デンマークだったかな。とにかく、自分はすごい点を取ったということがハッピーではなくて、みんなでやったということが一番幸せなんだという話を聞いて、やっぱりそれは大事だよなと思ったことがあります。

そのウェルビーイングに続いて、何か教育大綱の中に入れてたいことがあったらお願いします。

渡部教育長 この場で何回もお話をさせていただいていることなんですが、私は、学びの最前線にいて、直接子どもに接する先生方こそが子どもたちに未来への希望を語ってほしいといつも思っています。そのためには心の余裕が必要でして、子どもの変化に応じて教育を転換させていくのは、もちろん先生方は理解していますが、余裕がないというところ

るので、しっかり向き合えていけないんじゃないかと思っています。先生方の負担感ばかりが増すのでは、効果が現れなくなることもありますので、先生方が余裕を持ってしっかりと向き合えるようにしたいと思っています。

今年度は、働き方改革のモデル校をつくって、実践を重ねています。それから、全校長先生に働き方改革の研修も行いましたが、まだまだ十分だとは言えません。このことには十分留意していきたいと思っていますので、多分、表面的には出てこないと思いますが、それが考え方として基盤になっていけばいいなと思っています。

保坂区長 子どもに接する先生方自体が寝不足だったり、追われていたりして、対話する余裕がないというところがあるとすればというか、そういうふうに言われていますので、よかれと思って、いろんな改革を打ち出す、それが多忙化をさらに加速、より忙しくなるというような悪循環を断たなければいけないということも大事な点だと思います。

それでは、澁澤委員、お願いします。

澁澤委員 先ほどの教育長のお話にあったんですけども、本当はここに子どもがいなきゃおかしいんだなということに気づきました。今回の教育大綱は無理かもしれないですけども、本当は子どもたちに教育大綱をつくってもらって、僕たちはちょっとアドバイスするぐらいの感じが本来の教育大綱かもしれないです。だって、10年後、20年後は彼らが中心になるわけですから、そんなことをまず最初に思いました。

それから、ウェルビーイングの話にかかって言うと、やっぱり人生はドゥー（D0）ではなくて、ビー（BE）なんだと思います。ビーというのは、どう生きるかという、まさに生き方というのがウェルビーイングです。職業選択をさせるために教育をするのではなくて、生き方をどうつくっていくかということに尽きるんだと思います。生き方づくりのサポートをどうやって教育の現場でできるのかということが重要ですし、そのためには、確かに今の教科というものが重要なかもしれませんが、それにとらわれずに、本当は総合的な視点を持って俯瞰的に物事を判断していくという、難しい言葉でメタ認知とかとよく言われています。非認知的能力も含めてなんだと思いますが、ある意味では、社会を冷静に批判的にクリティカルに見て、自分の生きている場所、それから、これから進もうとしていることを総合的に考えられる子どもになってもらいたいなと思っています。

まさにそれが各自が持っているそもそもの さっき個才というお話が前のフレーズで出ましたけれども、まさに持っている才能をどう世の中に解き放していけるか、縛っているものを解き放すという視点で、私たちは教育というものを考えるべきなのかなと強く感

じております。

以上です。

保坂区長 チャットGPTの話もちょっと出ていて、まだ技術的に黎明期だけれども、今、物すごい勢いで生成AIが広がっていますし、大人が生活している社会、子どもたちの現場にも多分入ってきているんだろうと思います。

これについて、世界各国でも相当議論が行われていて、この技術が人類を飛躍させるという楽観的な面だけではなくて、人類を相当退化させてしまうのではないかと、あるいは、暴走が起こるんじゃないかというようなことも懸念されています。確かに私もいろいろ試してみると、すごいなと思う反面、こんなでたらめなことを断言するのという驚き。今この段階だからという問題かもしれませんが、考えるとか、問うとか、分からないから試行錯誤して、そこで認識を得るみたいなことをさんざん我々はやってきたことを、ボタンを1つ、キーボードを押せば、何か答えが返ってくるということと、ここで今必要な学びの質の改革というのは、相当クロスするけれども、そこで違いもくっきり出てくるのかなと。そこは非常に表すのが難しいですが、その点はいかがですか。

澁澤委員 まさにこの議論は、チャットGPTを使われるとすぐ分かると思うんですけども、世田谷区の教育大綱をこれから改定しようと思います、それに対してどういう案がありますかというのと、多分、物すごく耳触りのいい言葉がちゃんと出てきて、読む人が読んだら、これは大綱じゃないかと思うようなのが出てきます。それは何も私たちだけのツールじゃなくて、子どもたち一人一人もそのツールを持っているということです。その中で、自分たちがどう問いを発せられるのか、あるいは、チャットGPTに対して何を求めるのかということ。それは、自分がどう生きていくか、まさにウェルビーイングにつながっているんですけども、自分は何を大切に思って、人との共同関係の中で、どうやって自分らしく生きていくことを幸せと思えるかということ、より子どもたちに深く問うていかないと、一番有利なものは何ですかというものに対しては、すぐ答えが出てきますから、人生を単なる選択にさせないで、自分たちが生き方をつくっていくんだという形にさせていくような姿勢は示していかなくちゃいけないなと思います。

保坂区長 ありがとうございます。

1回目の御発言の中で、本当はここに子どもがいなければいけないというのは、そのとおりだと思います。ただ、教育大綱をつくる過程で、教育委員会と連携がうまくできれば、子どもたちが持っているタブレットに骨子というんですか、骨組みを投げて、子どもたち

はどう思うかみたいなことでお尋ねすることも、これは従前よりも非常に簡単にできるようになり、そして、多くの意見を集合して考えてみるようリアルな場も追求してみたいと思います。これからの総合教育会議の次回か次々回には、子どもたちも登場できる回にしたいと思いました。

それでは、どんな教育大綱にしたいかということで、鈴木委員からお願いします。

鈴木委員 先ほど私が最初にお話ししましたが、未来の世田谷に生きる子どもの姿をどう描くかということで、今いろいろなキーワードを考えてはいたのですが、私たち大人が考えるキーワードも大切ですが、先ほど澁澤委員から出た子どもというのも大切ですので、世田谷の教育を受けてきた若者、高校生だったり、大学生だったり、30代ぐらいまでの方々から出たキーワードというのも大切なのかなと私は感じます。ぜひ若者の意見も取り入れた大綱になればと考えております。

以上です。

保坂区長 ありがとうございます。

今、基本計画がつくられようとしていて、その答申の中に教育をめぐるあの記述があったということで、事務局から紹介があったと思います。この中にも、子ども・若者にフォーカスした内容がありまして、子どもだけじゃなくて、18歳から20代、30代の人たちにも意見表明をしてもらいというようなことを経て、計画自体も策定していきたいと考えています。そういった中で、若者の声も聞いていけたらなと思います。

これで一通りお話を聞いたんですが、何か語り漏らしているということで御発言はありますか。大丈夫ですか。

それでは、簡単に取りまとめて、第2部を終了したいと思います。

教育大綱というのは 学校教育、あるいは、学校の外で誰に出会い、学ぶかというのは、私自身の場合や周りの子どもたちを見ても、この人に出会ったからこうなったんだよねという非常に分かりやすい、極めて短期的に、ほんの1週間だけでも子どもは変わっていくんだなと。可塑性に富んでいるといえますか、子どもたちが 今、ウェルビーイングというお話がありましたけれども、世の中というのはなかなか楽しくないんじゃないか、自分1人いたからといって、どうにもならないんじゃないか、もっと言うと、誰からも必要とされていないのかもしれない、自分の命なんていうのはあまり意義のないものかもしれないと思って悩んでいる子どもたち、若者たちが世田谷区内でも非常に多いんです。そうではなくて、この世の中で、非常に希望を失うような、かなり大変な将来像なり困難な

課題はあるけれども、こうやって1つ、自分の生き方をつくってみよう。それを小中学生のときに全部発見しろというのは無理な話かもしれませんが、こんなふうにやってみたいなという、ちょっと心が温かくなるようなポジティブな出会いや発見や学びがもっと世田谷区を見渡すと、大変多くの教育機関もありますし、研究所もありますし、また、専門的な技術を持ったエンジニアの方や、あるいは都市農業もありますし、とてもたくさんあるんです。

学校からちょっと外に出て、町全体を学校にしようみたいな発想も今日いただきましたけれども、やはり子どもたち自身が内側から静かに燃焼していくような、自分の体にしっかり入っていくような学び、育ちの環境をつくっていかれたらと思いますし、極めて抽象的かもしれませんが、今後、最終的には具体的な方針に落ちていく際の一番最初のデッサンだと思います。ぜひ、会場の皆さんも、オンラインで見ている皆さんにも、教育大綱にこんなキーワードはどうだろうかという御提案があれば、書き入れて提案をしていただきたいと思いますし、そんな呼びかけを子どもたちも含めてやっていきたいと思えます。みんなでつくった教育大綱 教育総合会議をやって積み上げた議論とともに、多くの意見を聞きながら、多分、短い文章になると思いますが、教育大綱という形でまとめようということを今日の総合教育会議で確認したいと思えます。

そういうことでまとめにさせていただきます。

今日は長時間にわたりましてありがとうございました。

司会にマイクを戻します。

司会 区長、教育委員の皆様、ありがとうございました。

以上をもちまして令和5年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。

なお、本日の総合教育会議は、近日中に世田谷区の公式YouTubeチャンネルで配信する予定です。YouTubeでは、過去の回も配信しておりますので、併せて御覧いただければ幸いです。

改めまして皆様、長時間にわたりましてありがとうございました。これをもちまして終了いたします。お疲れさまでした。

午後3時57分閉会